

テレビポーターション・マン 登場人物

**2031年**

岡田鉄男（25） テレビポーターション・マン

岡田由美子（48） 鉄男の母

岡田紗枝<sup>さえ</sup>（28） 鉄男の姉

岡田武雄（52） 鉄男の父

池尻達夫（25） 刑事

沼田芳三（55） 刑事

**2038年**

岡田鉄男（32）

福井良平（63） JAXA 理事

ティム・マクニール（59）

NASA 火星移住担当

スポーツカーの男（19）

母親 A（28） 男の子の母

ロバート・ジョーダン（31） 検問官

アルバート・ウェイン大佐（62）

アメリカ第五空軍司令官

マイク・ケンドール(35) パイロット  
 クリス・フオワード(42) 横田基地管制官  
 和久井(55) 杉原探偵事務所の探偵  
 中山幸三(71) 嵐山精機社長  
 受付嬢(22) JAXA宇宙センター受付  
 町田百合(43) JAXA訓練担当  
 大井明(52) JAXA医師  
 玉井健介(37) 紗枝の夫  
 玉井亨(6) とおる 紗枝の子供  
 ステファニー・ミラン(32) 医師  
 キャリー・ミラン(3) ステファニーの娘  
 ジョン・ダーウエル(76) 農業学者  
 エディ・ダーウエル(43) ジョンの息子  
 アーノルド・モリソン(61) ジョンの弁護士  
 マギー(70) ジョンの元妻  
 ジョージ・ミラン(68) ステファニーの父  
 ヘザー・ミラン(66) ステファニーの母  
 ステイブ・ランカスター(45)  
 マーズ7号船長  
 ジェシー・ダグラス(35) ステフの元恋人

リチャード・メイヤーズ（35）

火星基地司令官

マニー・ランカスター（40） 船長の妻

オリン マーズ7号のA1ロボット

アイオン マーズ8号のA1ロボット

**2140年**

メラニー・シングルトン（52）

東キャナル市長

ライアン・ホール（39） 保安官

テレポーション・マン

T 「2031年」

○ 墨田区のアパート・外観（夜）

かなり年代を経た2階建てのアパート。

○ 2階の一室・居間（夜）

母、岡田由美子（48）と娘の紗枝<sup>さえ</sup>（28）が、食後のお茶を飲んでいる。

小さなテレビにはクイズ番組。

出演者のギャグに二人笑う。

そのとき玄関のドアがバタンと開け

られ、由美子の夫、岡田武雄（52）

が荒々しく入ってくる。

相当酔っていて、土足で上がり込む。

武雄「とうとう見つけたぞ。

どこへ逃げようと見つけるんだから。

俺をバカにするなよ！」

というなり、持ってきたバットを振り上げる。

紗枝、母の前に立ちはだかり、

紗枝「お父さん！ やめて！」

武雄、バットを横に払う。

バットは紗枝の左腕に当たり、骨の折れる音が。

痛さに悶絶する紗枝、倒れる。

由美子「あなた、許して！」

武雄「なにお！」

というなり、由美子の頭にバットを振り下ろす。

頭蓋骨の碎ける音とともに血が噴き出す。

由美子はそのまま崩れ落ちる。

そのとき、長男岡田鉄男（25）が帰ってくる。

鉄男「あっ！ なにをする！ このクソおやじ！」

いい放つが早いか、鉄男の姿は瞬時に

武雄の背後に回り、羽交い絞めにする。  
武雄の手からバットが落ちる。  
そして次の瞬間、二人の姿は消える。

○静岡上空10キロ（夜）

突然現れる鉄男と武雄。  
と同時に落下し始める。

鉄男「死ね！」

と両手を解くと武雄の体は、誰もいな  
い工場のコンクリートの地面へと。  
次の瞬間、鉄男の姿は消える。  
物音に気付いた守衛（63）が近づく。

○鉄男たちのアパートの居間（夜）

鉄男、ボンという音とともに現れる。

鉄男「姉ちゃん！」

紗枝「お母さんは？ お母さんは？」

喘ぎながら、母を心配する紗枝。

鉄男、携帯を取り出し、救急車を呼ぶ。

T 「2日後」

○整形外科病院個室

紗枝がベッドに起きて、あらぬ方を眺めている。

左腕と胸はギプスと包帯で固められている。

そこへ池尻達夫刑事（25）と、沼田芳三刑事（55）が入ってくる。

警察手帳を見せて

沼田「捜査一課の沼田と申します。

岡田紗枝さんですね。

お加減いかがですか？」

紗枝「はい」

沼田「少々お尋ねしたいことがあるんですが、よろしいですか？」

紗枝「はい」

池尻「あの、お父さんは裁判所から、あなた方3人に接近禁止命令が出ていましたね」

紗枝「はい」

池尻「それでも頻繁にうろつくので、あなた

方はあるのアパートに引っ越しを」

紗枝「ええ、10年前です。もうあのことは終わったと思っていたんですが・・・」

池尻「それでお父さんは、見つけたお母さんを殺し・・・」

そのとき紗枝が泣き出す。

沼田「ああ、すみません。」

(池尻を睨みつける沼田)

どうしても確かめたいことがありまして、許してください。

それから、弟さんの鉄男さんが帰ってきて、止めに入ったんですね」

紗枝「はい」

沼田「そこからはよくわからないんです」

紗枝「・・・」

沼田「そこで弟さんの話では、もみ合っているうちに、お父さんが逃げ出してしまったと。

それから救急車を呼んで・・・」

紗枝「そのとおりです」



池尻「あの・・・その後のお父さんの足取りが掴めないんです」

紗枝「・・・わたしにもわかりません」

池尻「弟さんはずっとそこにいたんですね」

紗枝「はい、あの、ちょっと横にならせてください」

沼田「ああ、気づかずにすみません。

あの、なにか思い出したことがあったら知らせてください」

と名刺を差し出す。

紗枝「はい」

○病院駐車場

池尻「あの静岡の変死体は、なんですかね」

沼田「岡田武雄であるはずがない」

池尻「でも、ポケットに期限切れの岡田武雄名義の運転免許証がありましたよ」

沼田「さあ、さっぱりわからない。

ともかくそいつの歯型鑑定とDNA鑑定の出るのを待とう。

それとこのあたりの防犯カメラをしらみつ  
ぶしに当たろう」

池尻「なんか、あの鉄男という弟が知ってい  
そうな気がするんですけど」

沼田「うーん、さあ、どうだかな」

○同・病室

鉄男病室に入ってくる。

鉄男「姉ちゃん、どお？」

紗枝「ああ、鉄ちゃん、どうしてたの？

心配してたのよ」

鉄男「ああ、あれから警察が来て、現場でい  
ろいろ聞かれて、それでも足りずに警察ま  
で連れていかれて、根掘り葉掘り聞かれた。

夜更けになって、帰っていいと言われたけ  
ど、あの部屋へ帰るのは辛つらくて、警察の待  
合で朝までいた」

紗枝「この病院どうして分かったの？」

鉄男「警察で教えてもらった」

紗枝「まあ、そうだったの。それでお父さん

は・・・」

鉄男、ベッド上の通話装置を指さし、唇に指を当て、目くばせする。

紗枝、うなづく。

紗枝「屋上へ行ってみない？」

鉄男「うん」

鉄男、紗枝の右腕に手を当ててベッドから降ろす。

○病院屋上

陽が当たり、まぶしい。

鉄男「腕、痛くない？」

紗枝「痛み止めが効いてるから」

鉄男「そう」

紗枝「それでお父さんは・・・」

鉄男「俺が殺した」

紗枝「どうやって」

鉄男「空の高いところから投げ落とした」

身震いする紗枝。

紗枝「・・・」

鉄男「ああいうことが起きれば百回でも千回でも俺はあいつを殺す。

「だけど・・・、なんか辛<sup>っ</sup>いんだ」

紗枝「・・・」

二人は大きなため息をつく。

鉄男、頭を掻きむしる。

紗枝「あんたの超能力は、高校生ごろからだったわね」

鉄男「うん」

紗枝「ときどき使うの？」

鉄男「いや、なんだか怖くてやりたくない」

紗枝「そうね。そのほうがいいわね。

人には黙ってるのよ」

二人、静かに雲を眺める。

鉄男「あの、姉ちゃん」

紗枝「なに？」

鉄男「あの部屋をかたづけけたら、大家さんに  
見てもらって、引越<sup>つ</sup>しするつもりなんだ

けど、いい？」

紗枝「そうね。」

あそこに住むのはちょっと・・・」

鉄男「お母さんの葬式どうする？」

紗枝「葬式はしません。」

お骨をもらったなら、手元供養の小さな骨壺に入れて、家で供養しましょう」

鉄男「田舎の岡田の墓には、入りたくないよね」

T 「2048年 火星接近の年

筑波・JAXA宇宙博。」

○展示会場横の芝生広場

広場は人気がない。

ベンチに二人の男が座っている。

T 「JAXA理事 福井良平（63）

NASA火星移住担当

タイム・マクニール（59）」

福井「大変なことになったね」

マクニール「うん。」

今朝の一報で知ったんだがね。

夕方の便で帰国するよ」

流ちょうな日本語で話すマクニール。

福井「いったいどうなったんだ」

マクニール「マーズ7号に姿勢制御エンジン

があるだろう。」

そのメイン燃料タンクの、ペントバルブが

故障して、ノズルから噴射できなくなった」

福井「交換部品はなかったのか？」

マクニール「1000万点の部品のスペアを

すべてそろえることはできないよ」

福井「なにか手立てはあるのか」

マクニール「たぶん難しいね」

福井「だと、どうなるんだ」

マクニール「火星まで、あとおおよそ2000

万kmだが、軌道が0・1度ずれても、マ

ーズ7号は火星に着けない」

福井「ああ・・・」

少し離れたところに、あの岡田鉄男（3  
2）がポケットに手を突っ込んで歩い  
て来る。  
身長170cmくらい。  
肩幅が広く、腕力は有りそう。  
顔はエラが張り、鼻の穴は大きく、目  
と目の間隔が少し広い。  
とてもイケメンには程遠い。  
ただ細い眼だけが優しさを湛<sup>た</sup>えて居  
る。  
展示場脇の歩道を5歳くらいの男の子  
が走っている。  
その時、キュルキュルとブレーキの音  
がしたかと思うと、建物の角を赤いス  
ポーツカーが猛スピードで男の子の  
ほうへ。  
次の瞬間、鉄男の姿が消えたかと思  
うと、男の子のそばへ。  
そのまた次の瞬間、鉄男は子供を抱え  
て20m先の芝生へ。

急ブレーキの音。

車の窓から若い男が

若い男（19）「バカヤロー。どこ見て歩いてんだ！」

叫ぶなり、猛スピードで広場の外へ。

マクニール「あっ！」

福井「あっ！」

マクニール「テレポーターション！」

福井「瞬間移動！」

マクニール「見たか？」

福井「見た！」

二人は駆け出す。

鉄男と男の子の傍に駆けってきた二人。

福井「ああっ、おどろいた。大丈夫かい」

それを聞いて男の子は大声で泣き出す。

近くのベンチで背中を向けてほかの母

親と話し込んでいたその男の子の母

親が駆けってくる。

母親 A（28）「まあ、どうしたの！」

ママのそば離れちゃいけないっていったで



しよう。

あんだ、この子になにしたの。

警察呼ぶから」

福井「何言ってるんですか奥さん。

この人はお子さんが車に轢かれそうにな

ったのを助けたんですよ」

母親 A「ウソッ」

福井「嘘なもんですか。小さいお子さんはよ

く見ていないと」

母親 A、フンと踵を返して子供の手を

邪険に引っ張り、離れてゆく。

福井「ひどい母親だ、礼も言わないで」

福井、鉄男の方を振り返り、胸のポケ

ットから名刺を取り出し、鉄男に渡す。

福井「はじめまして。私は J A X A の理事を

しております福井と申します。

こちらは N A S A のマクニールさん」

マクニール「どうぞよろしく」

鉄男「あ、はい。．．．こちらこそ」

福井「それで、君の名は？」

鉄男「・・・鉄男と申します」

福井「名字は？」

鉄男「それは勘弁してください」

福井「ふーん、ま、いいでしょう。

ところで今君がやった瞬間移動ね」

鉄男「・・・」

福井「話したくないのかい？」

鉄男「人に知られると困るんです」

マクニール「そりゃあそうだろう。

もし世間に知れ渡ったら、世界中の諜報機

関や、軍事戦略部門が先を争って君を確保

しようとする。

ほんとにそれは、君の言う通り危険なこと

だ」

福井「そうだな、そのとおりだ。

ごめん。

でも、君のその能力が・・・テレポーター

ションっていうんだけど、人のためになる

んだったら・・・」

鉄男「・・・」

福井「お願いがあるんだけど、君のその能力を調べさせてもらえないかね。もちろん極秘で」

鉄男「・・・」

福井「たのむよ。お願いだから」

鉄男「ええ、・・・まあ」

福井「本当かい、それはありがとう。」

マクニール「それでね、君の超能力は、自分だけ瞬間移動するのではなく、君が触っているものも一緒に移動するんだね」

鉄男「そうです」

マクニール「一緒に移動できる物の大きさや重さはどのくらい？」

鉄男「さあ」

マクニール「今までで一番重いものを動かしたの？」

鉄男「以前脱輪したダンプを、人が見ていないときに道路に引き上げたことがあります」

マクニール「移動できる距離は？」

鉄男「こっそりオーストラリアまで跳んだことがあります」

福井「直接？」

鉄男「いえ。

一度飛行機で観光して、帰って来てから跳びました。

この目で見えていないところへは跳べません」  
マクニール「ちよつと、電話してくる。思いついたことがあってね」

福井「ああ」

マクニール、100mほど離れて携帯電話で話し出す。

福井「レポーターションするとき、何が起こってるの？」

鉄男「なんというか、その・・・。  
周りの空間をゆがめて、移動先を引き寄せ  
るって感じ・・・」

福井「鉄男君、重いものを動かすのはたいへん  
なんでしょう」

鉄男「いいえ、一枚の紙を右から左に移す程

度です」

福井「へえ。ちよつと想像できないなあ。  
君のその能力を知ってる人はいるの？」

鉄男「・・・いいえ」

福井「その能力は遺伝なの？」

君の肉親で同じ能力を持っている人は」

鉄男「いいえ、いません」

マクニール、小走りでやってくる。

マクニール「鉄男さん、今から横田基地に

一緒に来てもらえないだろうか」

福井「なんだい、突然」

マクニール「君も来てくれ。

鉄男さん、頼むよ」

鉄男「今日は休みだから・・・」

マクニール「じゃあ、行こう」

○米軍横田基地・検問所（夜）

車の窓からIDを提示するマクニール。

検問官ロバート・ジョーダン（31）「The

Commander would like to see you,

sir」

**字幕**（司令官がお会いしたいそうです）

マクニール「Yes. You'll show me around,

won't you? 」

**字幕**（そう。案内してくれるかね）

ジョーダン「Yes,ser」

検問官、助手席に乗り込み、運転手に指示する。

車は管理棟へと動き出す。

○第五空軍司令部・司令官室（夜）

司令官アルバート・ウエイン大佐

（62）、出迎える。

マクニール「Sorry for the abruptness.

I'm McNeil from NASA.

This is Dr. Fukui of JAXA.」

**字幕**（突然にすみません）。

私はNASAのマクニールです。

こちらはJAXAの福井博士です）

ウエイン「I am the Fifth Air Force

Commander, Wayne.

I've received instructions from The President.

What the hell is going on? 」

**字幕**（司令官のウェインです。

大統領からの指示がありました。が、  
一体何事ですか）

マクニール「I need to borrow a C-130

transport plane to prepare for an  
upcoming magic show in front of the  
President.」

**字幕**（大統領の前でマジックをやります。

それでC130を貸してほしいのですが）  
ウェイン「I'll lend it to you since the  
President ordered it,  
But I doubt you'll break it.」

**字幕**（大統領令ですからお貸ししますが、  
壊すようなことはないでしょうね）

マクニール「It'll be fine」

**字幕**（鉄男のほうを見ながら）それは大丈夫

夫です)

ウェイン「Do you're going to make it fly.?」

字幕 (飛行させるのかね)

マクニール「No, it will remain parked as it is now.

Well, then, let's get started.」

字幕 (いいえ、現在の駐機のままです。

では早速お願いします)

ウェイン「Okay, this way, please」

字幕 (じゃ、こちらへ)

○ C 1 3 0 輸送機のそば (夜)

巨大な輸送機が黒々と横たわっている。

ウェイン「He is the pilot, Mike Kendall」

字幕 (彼がパイロットのマイク・ケンドー

ル (35)です)

マクニール「How do you do.

You, myself, and this man, Tetsuo, will

be on board.」



字幕（よろしく。

あなたと、私と、それからこの鉄男さんが  
乗ります）

ウエイン「Who is he? 」

字幕（その人は？）

マクニール「He is the magician」

字幕（マジシャンです）

ウエイン「Oh, I see.

Well, Kendall, show them the way.」

字幕（ああ、なるほど。

じゃあ、ケンドール、案内してくれたまえ）

三人は、コックピット横の昇降口から

機内にはいる。

ウエインと福井は歩いて管制棟に。

○ C 1 3 0 コックピット（夜）

マクニール「That's the captain's seat on  
the left.」

字幕（左が機長席だね）

ケンドール「Yes, ser」

マクニール「鉄男さん、そこに座って。」

操縦桿に手を添えて」

ケンドール「Please don't touch anything  
else.」

**字幕**（どうぞ他の物に手を触れないように）  
マクニール「鉄男さん、他の物には触らない  
ようにね。」

Contact tower to turn on runway right  
guidance lights.」

**字幕**（管制塔に連絡して、右滑走路の誘  
導灯を点灯するように）

ケンドール「Yes, sir.」

○横田基地・航空管制棟（夜）

管制官クリス・フオワード（42）「He wants  
us to turn on the guide lights, sir.」

**字幕**（誘導灯を点灯してくれとのことだ  
す  
が）

ウェイン「OK.」

誘導灯が、はるか彼方で灯る。

福井、外の様子を携帯で動画撮影し始める。

○ C 1 3 0 コックピット（夜）

マクニール「鉄男さん、あの誘導灯のところで  
ろまで機体を動かして」

鉄男「はい」

副操縦席のケンドール、怪訝けげんな顔を  
してマクニールを見上げる。

マクニール「まだかね、鉄男さん」

鉄男「もう移動しました」

マクニール「ええっ？」

外には煌々と誘導灯が間近に。

ケンドール「Oh my God !」

何の物音も立てずに機体は滑走路端  
に。

マクニール「じゃ、今度はもとの所へ戻して」  
輸送機は瞬時にもとの場所へ。

○ 管制塔（夜）

ウェイン「Oh!」

笑いながらうなづく福井。

口を開け、あきれる管制官。

ウェイン「How the hell did you do

that?」

字幕（いったい、どうやったんだ？）

福井「I can't divulge the nature of the  
magic trick.」

字幕（マジックの種明かしはできません）

ウェイン「woom」

○ 横田基地食堂（夜）

周囲に兵士のいない席で、鉄男と福井  
とマクニールが簡単な食事を。

マクニール「鉄男さん、さっきのことで君の  
テレポーターション能力が証明された。

それに加えてテレキネシスの能力も。

そこで君にお願いがある」

鉄男「なんですか」

マクニール「マーズ7号のことは知ってい

る？」

鉄男「ええ。何か月か前に火星に向けて出発した火星移住ロケットですな」

マクニール「そうだ。その7号にトラブルが起こったんだ」

マクニール、15インチのタブレットを取り出し、テーブルに置く。

マクニール「7号には人口重力を作る回転ホイールの上に、回転しないリングがあり、そこに十文字に4個の姿勢コントロールの噴射ノズルがついているが、それが働かなくなった」

マクニール、タブレットにマーズ7号の写真を表示してホイールを指さす。

鉄男「どの程度大変なんですか」

福井「ロケットは火星に着くまでに何度も姿勢をコントロールしている。

特に、出発と到着、それから到着1か月前に減速のため、パラボラを火星軌道上のプラズマビーム砲に向けるとき」

マクニール、地球と火星の間に浮かぶ  
マーズ7号を180度回転させる

鉄男「プラズマビームで動いていることは知  
っていました。が……」

福井「それまでは地球のISS3近くのプラ  
ズマビーム砲からのビームを受けて、その  
エネルギーで飛んでいたが、そのままだと  
火星近くでは秒速30キロ以上になり、火  
星を通り過ぎてしまう。

そこで途中で、パラボラの向きを火星に向  
けて、火星軌道上のプラズマビームを受け  
て逆噴射して、火星に着くころには時速1  
00キロぐらいに減速する」

マクニール「しかし、姿勢制御がうまくいか  
ないと、たいへんなことになってしまう」

福井「7号には、火星移住者家族50人と、  
乗組員夫婦3組、合計56人が乗っている。

彼らの命が危険にさらされる」

鉄男「……」

3人とも押し黙ってしまう。

マクニール「そこで君にお願いがある。  
君のその能力で7号を助けてくれないか  
ということだ」

鉄男「しかし」

マクニール「今、ISS3、国際宇宙ステーション3のそばにマーズ8号がいる。  
マーズ7号と一緒に出発するはずだったが、  
地球からの移住者を乗せるロケットの故障で、今は浮かんでいるだけだ  
それに乗ってテレポーターションで7号を追いかけてほしい」

福井「それはまた！」

鉄男「無茶ですよ。」

私は宇宙船の操縦なんかできないし」

マクニール「それは心配しなくていい。

8号には高性能なコンピュータが載っていて、全部やってくれる」

福井「今から出発しても、とても追いつけないが・・・」

マクニール「そこだよ。」

まず鉄男さんにマーズ8号とともに月まで瞬間移動してもらおう。  
それが成功すれば、140回、同程度のレポートをすれば、7号に追いつく」

鉄男「月までの距離は？」

マクニール「385000Km」

鉄男「無理ですよ。無理、無理」

マクニール「やってみたことは？」

鉄男「無いに決まってるじゃありませんか」

マクニール「こちらもダメで元々と考えている。  
そんなに責任を感じなくていい」

鉄男「でも・・・」

マクニール「私が考えたプランはこうだ。

まず君に多少の訓練を受けてもらう。  
それから、君はロケットを使わずに、地上から宇宙服を着て、直接8号にレポートする。

今現在、地球から跳べる宇宙船がないから」

鉄男、頭を抱える。



マクニール「君が8号にテレポートできなかつたときは、この話は無かつたことにする」

福井「おどろいたなあ」

マクニール「次は8号を1回で月まで移動させる。

これも失敗だったら、私もあきらめる。

そのときは君は地球に帰ってくればいい。

この時点では、マーズ8号になんの損傷も起きないはずから、火星協会もNASAも了承してくれた」

鉄男「ああ・・・」

マクニール「頼むよ。

7号の56人の乗客・乗員を助けるために」

鉄男「一晩考えさせてくれませんか」

福井「そうた、そのほうがいい。

私の名刺に電話番号も載っているから、決まったら電話して」

マクニール「私はすぐアメリカへ帰国する。

連絡は福井さんを通じて」

○新幹線新横浜駅前（夜）

タクシーから鉄男降りてくる。

鉄男「失礼します」

福井「ああ、じゃあ電話待ってるよ」

鉄男「はい」

一礼して、鉄男、駅の構内へ。

後ろのタクシーから降りてきた男が福井のタクシーに近づき、ガラスをコンコンと。

福井、タクシーの窓を開く。

男「杉原探偵事務所の和久井（55）と申します。」

（鉄男を指さしながら）あの人を尾っけるんですね」

福井「そうです。よろしく」

和久井「はい」

和久井、さっさと鉄男を追う。

○嵐山精機の工場・外観（朝）

○嵐山精機社長室（朝）

鉄男、ドアを開けて入ってくる。

鉄男「おはようございます」

中山幸三社長（71）「やあ、おはよう。

朝早くなんだね」

鉄男「すみません、社長。

急なことで申し訳ありませんが。会社を辞めたいと思います」

中山社長「え？ え？ 」

鉄男「驚かしてすみません」

中山社長「本当かい？ 」

鉄男うなづく。

中山社長「なんか待遇に不満でもあるのか？ 」

鉄男「いえ。社長にはよくしていただいて感謝しております。

会社に何の不满もありません」

中山社長「じゃ、なんで」

鉄男「私が参加している天文愛好クラブのある人が、JAXAで電子制御の旋盤を

扱える人をさがしていると教えてくれました。  
た。

それで応募したら受かってしまいました」

中山社長「なんとまあ！」

鉄男「そういうことで、宇宙関係の仕事に  
憧れていたものですから。

社長に何の相談もなくやってしまって、本  
当にすみません」

中山社長「そうか、そういうことか。

いやあ、そういうことなら、我が社として  
も名誉なことだから・・・」

鉄男「ほんとにすみません。

高校卒業前からここへ押しかけて仕事を  
教えていただいたいて、この御恩は忘れるもの  
ではありません」

中山社長「ふうん、そうか。

じゃ、もしJAXAでの仕事が辛かったら  
ここへ帰ってこいよ、よそに行くんじゃないな  
いぞ」

鉄男「はい、それはもう」

中山社長「じゃ、元気で行ってこい」

鉄男「ありがとうございます。」

仕事のことは、昨夜のうちに、先輩に引き

継ぎましたから」

中山社長「そうか。うん、うん。」

人事課へ行って、退職手続きをするんだよ」

鉄男「はい、失礼します」

鉄男、一礼して部屋を出る。

○嵐山精機工場入口

鉄男、工場に深々とお辞儀する。

○ J A X A 筑波宇宙センター・外観（朝）

○宇宙センター正面受付（朝）

カウンターへ向かう鉄男。

受付嬢（22）「いらっしゃいませ」

鉄男「福井理事にお目にかかりたいのですが」

向こうから福井がやってくる。

福井「やあ、おはよう」

鉄男「おはようございます」

福井「よく決心してくれたね、ありがとう。

じゃ、こっちに来て」

福井に導かれて部屋の外へ。

○ J A X A 宇宙飛行士訓練棟・外観（朝）

○ 訓練棟事務室（朝）

町田百合（43）出迎える。

福井「おはよう」

町田「おはようございます」

福井「鉄男君、この人が訓練担当の町田君。

町田君、昨日極秘に知らせた鉄男君です。」

鉄男「おはようございます。よろしくお願い

します」

町田「こちらこそ。

福井先生、彼が超能力者って、ほんとなん

ですか？」

福井「ほんとなんだよ。誰にも話してないだ

ろうね」

町田「はい、それはもう」

福井「じゃ、頼むよ」

町田「はい。鉄男さん、ついてきてください」

鉄男「はい」

○ J A X A 会議ホール（朝）

小学校の体育館ほどの広さ。

そこには誰もいない。

椅子もテーブルもかたづけられている。

町田は鉄男を中央に立たせる。

町田、鉄男に大きなゴーグルを渡す。

町田「今日は、マーズ 8 号の実際の立体画像

を見てもらい、レポートする場所の感じ

をつかんでもらいます。

ゴーグルの右側のスイッチを入れてから、  
装着してください」

町田、テーブルの前に座り、コンピューターに触る。

鉄男、ゴーグルを頭に被る。

目の前には、宇宙の星々の中に、IS

S 3 と マーズ 8 号 が 浮 か ん で い る 。  
町 田 「 こ れ が 国 際 宇 宙 ス テ ー シ ョ ン | S S 3  
と マーズ 8 号 の 全 景 で す 。 」  
画 像 は 次 第 に 8 号 に 接 近 。



町 田 「 こ の マーズ 号 と い う 母 船 は 、 着 陸 船 と  
4 機 の 貨 物 船 を 火 星 に 届 け 、 2 年 後 に 地 球  
に 帰 っ て く る と い う 優 れ た 特 性 が あ り ま  
す 。  
そ の 最 大 の ポ イ ン ト は 、 燃 料 を 積 ま な く て



いいということです。

推進力は、太陽光から精製されるプラズマビームです。

地球と火星の軌道上のプラズマビーム砲からエネルギーを受け取り、その力で進むからです」

鉄男「ええ」

町田「人類が火星に降りたつ前にやらなければならぬことが、このプラズマビーム砲2基のほかには3つつあります。

一つ目は2040年、マーズ・マグネタイザー号が、火星と太陽の均衡点に火星に

地磁気の鞘さやを作る装置を稼働させました」

マグネタイザー号の画像。

町田「これによって人間が着陸しても宇宙放射線を浴びる危険が、ほぼなくなりました。

2番目はエネルギーの問題です。

火星は寒い惑星です。

夏の昼間を除いて常時ヒーターで温めない  
と、人間はもちろん、作物も作れません。

そのため小型原子炉を持ち込む案が計画されましたが、安全性に問題があり、宇宙発電所の案が採用され、火星自転面60度ごと、7平方キロの薄膜太陽光パネルを6基浮かべ、レーザー光に搬送させて、火星基地の変電所に電力を送るプランが完了しました。

これがその宇宙発電所です」

ゴーグルに、宇宙に浮かぶ発電所が表示される。

町田「この案のいいところは、発電所の幾つかが火星の影に入っても、あとの発電所が中継して常時電力を搬送できるところです。

地上に、大きく重いバッテリーをたくさん用意する必要がない。

火星の日射量は地球の4割しかなく、それに頻繁に起こる砂嵐でそれさえ危ないから、地上に太陽光パネルを設置するのは今のところ効率が悪いの」

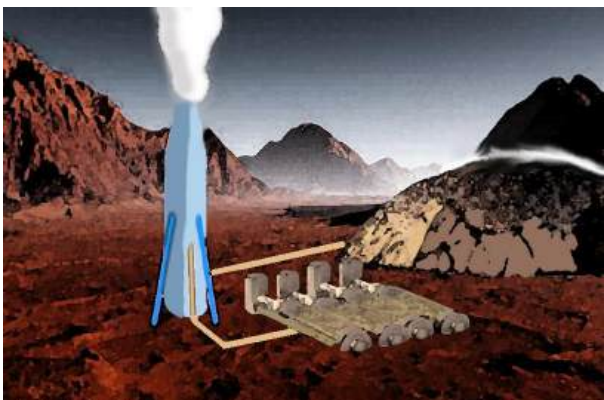
鉄男、大きなため息をつく。

町田「3番目は、移住者のための住まいと、水・食糧・酸素の確保です。

これを見てください」

火星基地のドームと、それに付随する設備全体が表示される。

町田「火星の北緯30度のアマゾニス平原に降りたマーズ2号が、ドームの中心に、地下の氷に達する管を挿入し、その中へヒーターを入れ、加熱して水蒸気を作ります。その噴き出した暖かい水蒸気はドームの冷たい壁で冷やされ、水滴となって落下します。



その水は、ドームの田畑に雨となって振り、一部、ドーム内の南端に横たえられた貨物ロケット4機の固形燃料が入っていたタンクに蓄えられます。

貨物室の貨物の入っていた区画にはとりあえず、人間が住むようになっていきます。さらに水はドームの外の装置で電気分解して酸素と水素を作ります

酸素はドームにパイプラインで運ばれます。ドームには他に、地下に眠っている窒素成分を取り出してドームに送り込んでいま

す。  
酸素も窒素も余った分は大気中に放出されます。  
ドームには、そのほか畑があります。  
面積は、一つのドームがヤンキースタジアムほど。  
一つのドームで100人分の作物が、1年を通して栽培されます。  
水素の方は、その一部を動力の燃料として使い、そのほかを大気中の二酸化炭素と反応させて、メタンを作り、これを今もマーズ2号の先端から上空に向けて噴き出しています。  
この温暖化ガス発生装置をすでに6基稼働させ、それによって、少しずつ大気が温まり火星全体の氷が解ける。  
将来的にはもっと発生装置を増やす。  
そうすれば、いつか湖や海ができる。  
出来た水辺にシアノバクテリアを投入して酸素を造らせる。

火星を温めるには、フロンが威力を持つけど、製造に大きなプラントが要ります。先には必ず利用するけれど、とりあえずはメタンガスを使うことになりました」

鉄男「それで水をふんだんに使えるのは、いつごろですか？」

町田「おおよそ2080年あたりだろうと

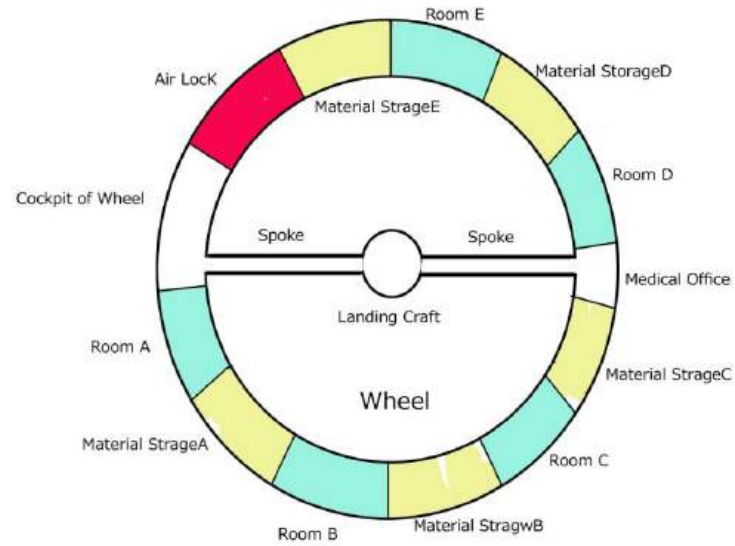
言われています。

さあ、マーズ8号に戻りましょう。

画像で見えているそのホイールという輪が乗組員の居住区で、回転して遠心力で人工重力を作ります。

このホイールだけは磁気に覆われて宇宙放射線を遮っています。

ホイール内は防磁設計になっています。  
磁気が電子機器や人体に悪影響があるか  
らです。  
中央に鉛筆みたいに突き出たのが火星着  
陸船です。  
着陸船の周囲に中型のロケットが4本あり  
ますが、それが物資運搬用のものです。



こうして2年に1度、マーズ号は火星に旅立ちますが、すべての旅に人間が乗り組むわけではありません。

それはたとえ火星と地球が接近しても、その距離が大きいと、積み込む食料、水などの必要物資があまりに多くなりすぎて、積載できなくなります。

だから、ルールとして、接近距離が7000万Km以下の時に人間が乗り組みます。それ以外の年は、A-Iロボットを何体も乗り組ませて、人間の居住環境を作らせるのです」

鉄男「ほう」

町田「前回2037年に出発したマーズ5号とマーズ6号で、人間が初めて大量に移り住んだのです。

さて、着陸船の先端に移動してください」

鉄男、数歩歩くと着陸船の正面に。

町田「先端に赤い大きなリングが描かれています。



そこがエアロックです。

左手で窪みの中の取っ手につかまり、右手を伸ばして、エアロック横の金具をつかんで、下に引き下ろしてください」

言われたとおり、手を差し出すと、ゴ—グルの中で、宇宙服に包まれた自分の腕が伸びるのがわかる。

町田「その中にボール状のハンドルがありますから、右へ1回、回してください」

するとエアロックがゆっくり開く。

町田「中へ入ってください」

歩いてエアロック内部へ。

町田「入ってきたスライド・ドアの右の赤い大きなボタンを叩いてください」

すると、ドアは素早く閉じる。

町田「振り返って、船内に入るドアのところまで泳ぎ、横の赤のボタンをたたいてください。」

エアロックに空気が満たされると、ランプが緑色になります。

そうしたら、ボタンをもう一度叩いてください」

たたくと、ドアが開き、船内へ。

○エアロックの外の部屋

町田「外へ出て、ドアの横の緑のボタンを叩いてください。

これでエアロックが閉じます。

ここまでが船内に入る手順です」

エアロックのドアは閉じる。

その部屋には6体の宇宙服が。

町田「ここから、宇宙服なしのモードです。

鉄棒の前に立ってください。

まずヘルメットを取ってください。

ロックをはずし、左へ回せば外れます。

手首の操作ボタンの *detaching* と書かれ

たボタンを押してください。

これは不用意に操作されないように、5回押すようになっていきます」

すると背面のジェットパックや酸素

ボンベのついたカバーが、パカッと後ろに倒れる。

町田「両手を宇宙服から抜いて胸の前で交差させ、それから体を後ろに大きくそらして、両手を宇宙服から出して鉄棒を握ります。すると鉄棒が自動でゆっくり上へあがって体を出します。

着陸船のなかは無重力です。

壁にくっつけてあるスキッパーシューズを一足取って履いてください。

シューズには面ファスナーがついていて、床に密着して歩けます。

その部屋の中央の湾曲した壁に向かって歩いてください」

鉄男3歩歩く。

面ファスナーのジャリジャリという音。

町田「そこに開口部があります。

その中に入ってください」

鉄男が言われた通り入ると、そこは筒

状の空間で、壁には長い梯子が伸びて  
いる。

ゆっくり鉄男は、梯子を伝いながら筒  
の奥のほうへ泳ぐ。

○着陸船中央通路の中

町田「周りに見えるのは、着陸するときの座  
席を並べた部屋です。一室に10人入れま  
す。

こういう部屋が5つあります  
梯子を伝いながら下へ降りてください」

5つ部屋が過ぎたとき、床に当たる。

○着陸船操縦室

大小のモニター群と、操作卓。

座席シートが7つ。

町田「ここが着陸船操縦室です。

操縦室は、他にホイールにもあります。

乗組員の活動する部屋です。

壁の円形の隔壁の前に立って、緑のボタン

を押してください。

隔壁が開きます。

そうしたら目の前の鉄棒を握って、足からその中へ入ってください」

○ スポークシャフト内部

鉄男が鉄棒を両手で握ったとたん、体が筒の中に吸い込まれる。と同時に隔壁が閉じる。

町田「このシャフトは、スポークと言って、着陸船と、回転しているホイール居住区を結ぶ通路です。

足を乗せる台に乗ってください。

目の前の黄色いボタンを押すと、ベルト駆動で君を下へ移動させます。

進むにつれ重力が増していきます」

ゴトンという音とともに落下が止まり隔壁が開き、明るい部屋に。

○ 回転ホイールの操縦室

高さ3 m・長さ10 m・幅5 mの部屋。  
一面に積み木を重ねたような、4つ  
の小部屋。

町田「その箱状の部屋は防音ベッドルームで  
夫婦やその家族が一部屋使います。

乗組員用のベッドルームは、ここだけは4  
つつ。

移住者の部屋には6つつあります。

その中は足を投げ出して、テーブルで仕事  
もできます。

外の部屋のテーブルで食事などができます。  
左に進んでください。

その正面のモニターや操作卓で着陸船を  
コントロールします。

部屋の奥の小部屋は、トイレとシャワール  
ーム兼洗面所です。

シャワーは一人につき1週間に1回、2分  
間で、その水は洗面所の水や、トイレの尿  
とともに浄化され使いまわしされます。」

鉄男「衣服はどうするのですか？」

町田「紙でできた下着・タオルは1週間使つて廃棄します。

ポロシャツは3週間、スラックスは6週間に1回交換します。

交換したものはまとめて火星に運びます。火星には水がありますから、洗濯ができます。

火星では、今は衣類の調達は大問題で、擦り切れるまで大事に着続けます。」

突き当りにドアが。

町田「緑のボタンを押してください。」

鉄男がボタンを押すとドアが開く。

町田「通常は、この隔壁は電動で開閉しますが、停電の時はドアのレバーで」

その部屋の右側の壁にはベルトで固定された大量の資材が並んでいる。

町田「そこは資材庫で食料・飲料水・衣類・装備品などが入っています。

また、大量の物資の搬入や、シャトルとのドッキングが行われるエアロックでもあ

ります。

居室と資材庫は一つ置きに並んでいます。  
なぜだかわかりますか」

鉄男「たぶん・・・、万一隕石などのメテオ  
ロイドなどが飛び込んできて、ある部屋を  
壊したとき、隔壁でほかの部屋の人たちが  
資材を守るためでは・・・」

町田「そう、そのとおり。

ちよっと潜水艦に似てるけどね。

さて、マーズ8号のあらましを見てもら  
いました。

ここから、一人で、さっきのエアロックま  
で行って、そこからまた戻ってきてくださ  
い」

こうして訓練は続く。

#### ○ 同・会議室

町田「お昼になりました。朝の訓練は終わり。

ゴーグルを外してください」

鉄男、ゴーグルをはずす。



額にびっしり汗。

町田「こちらへ」

促され、鉄男は町田に続く。

### ○控室

部屋に入ると、町田が椅子を勧める。

町田、紙袋からハンバーガーを取り出し、鉄男と自分の前に並べ、ポットからコーヒートをふたつのカップに注ぐ。

町田「こんなものでごめんなさい、福井先生から、あなたがほかの人と接触しないようにといわれていますので、食堂も使えません」

鉄男「一向にかまいません。ありがとうございます

います」

町田「どうぞ。

ハンバーガーはお嫌いじゃなかったですか？」

鉄男「いえ。よく食べています」

といいながら、包装を解く。

鉄男「いただきます。

あ、これ、お支払いします。

いくらですか？」

町田「いえ、これはJAXAの費用」

鉄男「ほんとですか？　じゃ、ステーキも」

笑い出す町田。

町田「そんなのだめよ。

JAXAは貧乏なの」

鉄男「冗談ですよ、冗談」

町田「あなた、お肉好き？」

鉄男「子供のころは、年に一回ぐらいしか食べられませんでした。

お金はあらかじめ父の酒代に消えていたから。

父はひどい奴で、酒を飲んでは母や私たちを殴っていました」

と、そこまで言っていて、鉄男気づいて口を押える。

鉄男「いましゃべったことは、聞かなかったことにしてください」

町田「わかったわ」

鉄男「すみません」

町田「結婚してるの？」

鉄男「いいえ。結婚はできません。

超能力を人に知られると、妻や子に災難が及びますから」

町田「好きな人はいたんでしょう？」

鉄男「ええ、でもあきらめました。

江戸時代に、葉隠はかくれという本があったでしょう？

町田「突然なに？」

鉄男「突然でもないです。

その中に（恋い死なん 後の煙のちにそれと知れ 終ついにもらさぬ 中の思いは）という歌

がありました。

恋の極意は忍にん恋れん、耐え忍ぶ恋だそうです」

町田「うーん」

鉄男「これを読んだ時、ああこれだと思いました。

死んだ後の、自分の遺体を燃やす焼き場の

煙に、恋焦がれていたこの気持を察してくれという・・・」

町田「すごいこと知ってるのね。」

いまどき流行らないけど」

鉄男「流行り廃りの話ではありません。これは恋して死ぬほど苦しい私の心の唯一の支えでした」

押し黙る二人。

町田「ところで本当にテレポーションができるの？　あなたは」

鉄男「ええ。やってみましょうか？」

町田「ぜひ」

次の瞬間、鉄男の体が椅子と一緒に部屋の隅へ。

町田「まあ！」

そしてまた次の瞬間、鉄男はもとの位置へ。

町田「ほんとだったのね。驚いた」

鉄男、コーヒを一啜り。

町田「福井先生は、あなたがマーズ8号を、

7号の近くまで短時間で移動できるので  
はと、お考えですが・・・」

鉄男「それは私にもわかりません」

町田「そう、そうよね。」

そんなことやるチャンスもないし・・・。

コーヒーのお替りどう？」

鉄男「いえ、もうけっこうです」

町田「じゃ、今から健康診断をします。ついで  
きてください」

○JAXA医務室

部屋には白衣の男が一人。

町田「こちらが診断してくださる大井先生。

先生、こちらがお話しました鉄男さん」

大井明医師(52)「やあ、いらっしゃい」

鉄男「こんにちは」

町田「じゃ私はこれで」

鉄男「はい、ありがとうございます」

こうして、問診、計測、診断と続くこ  
と2時間。

大井医師「済みました、どうぞこちらへ」

窓際のテーブルに招かれる。

大井医師「あなたの体には、とりあえずなんの異常もありません。

今から、いろんな予防接種をします。

予防と言っても宇宙船の乗組員はほとんど病気のリスクの無い人たちが選ばれていますから、この接種はあなたがほかの乗組員に伝染させる危険を防ぐためです」

鉄男「注射はいやだな」

大井医師「子供みたいだね。

じゃ、こちらへ」

複数の注射器の並んだテーブルへ。

大井医師「ほんとなら遺伝子検査で、君がどんな病気の可能性があるか調べるんだけど、時間が無いから」

○ J A X A 訓練センター正面玄関（夕方）

町田が鉄男を連れて出てくる。

町田「今日はお風呂はだめよ。それからお酒も」

鉄男「はい」

町田「それじゃあ明日は安静にして、あさつて来てくださいね。

なにか、熱が出たり、苦しくなったらここへ電話してね」

町田、カードを渡す。

鉄男「ええ」

そこへ福井理事がやってくる。

福井「やあ、終わったかね」

鉄男「ああ、はい」

福井「町田君、ごくろうさん」

町田「いいえ、先生、じゃ私はこれで」

福井「ほんとにありがとう」

町田、一礼して、構内へ。

福井「鉄男君、ちょっと食事しながら話さないかね」

鉄男「なんですか」

福井「うん。ちよつとね。」

そう時間は取らせないから、いいだろう？」

鉄男「ええ、まあ」

福井「じゃ、行こう」

○ 寿司屋の奥まった一室（夜）

福井「さあ、どうぞ」

目の前には、握り寿司と汁椀と3種類の副菜が。

福井「お酒はダメだったね」

鉄男「そうらしいです。

いただきます」

二人箸を動かし始める

福井「実はね、君の身分について考えることがあってね」

鉄男「身分？」

福井「君は会社を辞めてきたんだってね」

鉄男「ええ。迷ったんですけど・・・。

なぜ知ってるんですか？」

福井「君には申し訳ないが、調査機関を使っ



て君を調べさせた」

鉄男「ええ！ それは・・・」

福井「立場上、どこの誰ともわからない人にこんな大きなミッションを、ノーチェックで任せるわけにはいかない。

許してくれ」

鉄男「・・・」

福井「それで君の人となりも判ったし、真っ直ぐな人だということもわかった。

岡田鉄男君。

会社を辞めてまで協力してくれる君をそのままにすることはできないよ。

そこで君をJAXAで雇うことにした」

鉄男「ええ？」

福井「そりゃあそうさ。15年も勤めてきた会社を辞めるんだから、こちらもそれ相当の覚悟がいります」

鉄男「はい、でも・・・」

福井「いいんだ。気にしなくても。

そこで、この書類にサインをしておいてく

れないか」

3枚の書類を広げる。

福井「1枚は契約書で、1枚が乗組員の特別  
生命保険関係、こちらが給与振り込み口座  
依頼書類。あさって来るときサインして持  
ってきてくれたまえ」

鉄男戸惑う表情。

福井「それから、もし、このミッションで、  
万一君が怪我したり、死亡したときには、  
君のお姉さんに連絡を取ります。

ここまでするのは君固有のプラシバシー  
の侵害だとは分っているが私の心情とし  
ては、そうせざるを得ない。

分かってくれ」

鉄男、深く頭を下げる。

鉄男「すみません。そこまで気を使っていた  
だいて」

福井「いや、当然のことだから。

さあ、食べよう」

二人、箸を動かし始める。

福井「ああ、それから、君は体一つで宇宙服をまとって8号まで跳ぶわけだから、なんの荷物も持っていけない。」

鉄男「着替えなんかは？」

福井「全部そろっている。大丈夫」

鉄男「へえ」

○ J A X A V R 訓練室（朝）

小さな部屋に入ってくる鉄男と町田。

中は一脚の椅子とテーブルだけ。

後ろの壁には、隣の操作卓がガラス越しに見える。

町田「熱は出なかったみたいね」

鉄男「はい、大丈夫でした」

町田「そう、それはよかった。」

では、今日は最後の訓練で、地上からマ

ズ8号に飛び乗るためのプログラム。

そこに座ってください」

鉄男着席する。

町田「この3Dゴーグルを着けて」

この間と同じ جوجل。

町田「私は隣の部屋で指示します」

そういつて部屋を出てゆく町田。

جوجلを着ける鉄男。

جوجلにはほんのりと明るい空。

町田「(スピードカーから)これは朝方4時頃の

空で、今右からISS3と、マーズ8号が

一緒に上ってきます。

どちらも高度400Km

小さな光る二つの点が右から左へ動い

てゆく。

町田「8号を静止した状態で観察します」

8号までの距離は10Km

はつきりと8号の、ドーナツ状の

回転部やパラボラが見える。

町田「8号まで5Km

横に長い全体が表示される。

町田「8号まで1Km

جوجلの右から左まで全部8号の画

像が広がる。

町田「8号の速度を、ほんとの速度に戻します」

途端に、轟音とともに、巨大な構造物が右から左に、一瞬で移動。

左を振り向くと、あっと言う間に8号は小さな点に。

町田「その音は、プラネタリウム用に付け足したもので、ほんとは何の音も聞こえませんが、聞こえますか？」

鉄男「大きいため息をつきながら）、驚いた」

町田「そうですね？ その8号に君は飛び乗るんですよ」

鉄男「いやあ、ほんとに怖くなってきた。

町田「やってもらわないと困ります。」

町田「やってもらわないと困ります。」

君が8号まで一瞬にジャンプして、8号の取っ手に掴まったとしたら、君は動かない静止状態で、相手は1秒に8 Km。

掴まったとたんに、君の両腕は千切れてし

まいます」

身震いする鉄男。

町田「それを避けるには、君が1秒間に8Km瞬間移動を続けるんです。

それが疑似慣性となって、8号を追いかけることができません」

鉄男「ほんとにそんなことができるんですか？」

町田「わかりません。なにしろやった人がいないから」

鉄男「うーん」

町田「じゃあ、静止画でまず取りつく部分を確認しましょう」

画像は、回転ホイール中央に突き出た着陸船の先端の、赤い円の中のエアロツクに近づく。

さらに近づいて、エアロツク入口を表

示。  
町田「エアロツクへの入り方は前に学習しましたね。」

とりあえず、その取っ手に瞬間移動しながらしがみつくことです。まず、速度に慣れましょう。手元にスイッチがあります。

今から8号までの距離1 Km 速度秒速1 Kmで絵を動かします。

右に8号が現れたら、1秒ごとにスイッチを押してください。

一回押すごとに1 Km移動します」

絵が動き出し、8号が現れる。

鉄男、1秒ごとにスイッチを押す。

そのたびに、8号に近づく画像。

エアロック正面に。

町田「8号までの距離200m、秒速2 Km  
でもう一度」

今度は先ほどとは格段に速く動く8号。

必死でボタンを押す鉄男。

町田「さらに距離100m」

右から左へ8号が流れてゆく。

ボタンを押す指がこわばる。

この訓練を何度となく続ける。

町田「ごくろうさま。少し休みましょう」

しばらくして町田がコーヒーカップを下げて現れ、1つを鉄男に。

町田「どお？　なんとかやれそう？」

鉄男「さあ」

町田「だめよ。本気にならなきゃ。

56人の命が懸かっているんだから」

鉄男「この先の訓練は？」

町田「最後は距離10m　速度1秒に8Km  
でやります。

これで本番のカンを掴んでもらわなきゃ」  
鉄男「わかりました」

○ VR 訓練室の観察部屋

部屋に福井が入ってくる。

町田「そう、今よ」

VRの画像をモニターで見ている

町田、マイクをOFFに。



福井「どうだね」

町田「ええ、多分いけるんじゃないでしょう  
か」

福井「そうかね。そりゃあよかった。

後で部屋まで連れてきて」

町田「はい」

部屋を出てゆく福田。

○福井の理事室。

ノックの音。

福井「はいりたまえ」

鉄男、入ってきて、一礼。

福井「きつかったかい」

鉄男「はい」

福井「そうだろうねえ、ごくろうさん。

それで、君が8号に跳ぶ日がきまったか  
ら」

鉄男「いつですか？」

福井「あさっての朝4時。ここの訓練棟の屋  
上から。

そのとき、空に8号が登ってくる」

鉄男「雨の時は？」

福井「雨や曇りの時は中止。目に見えてない

とレポートできないんだよね。

天気予報では快晴だ」

鉄男「はい」

福井「それでね、鉄男君。

君はお姉さんに最後の別れを告げなきゃいけない。

8号にうまく乗れずに、ぶつかって死ぬかもしれない。

うまく乗り移って、火星への旅を始めたとしても、マーズ8号は移住船だから、地球に帰ることはできない。

これが最後だから、キッチンとさよならを言わなきゃだめだ」

鉄男、黙って下を向く。

鉄男「私もそう思っていました」

福井「そうか。うん、そうしたほうがいい。

それで、明日の午後ここへ来てくれたまえ。

あさったの出発前の準備があるから。

明日は、だからここで泊まることになる」

鉄男「はい」

福井「それからこれは契約書のコピーと、保険証」

硬く握手を交わす二人。

○玉井家外観（夜）

古い一戸建ての日本家屋。

○玉井家居間（夜）

食卓を、紗枝の夫、玉井健介（37）、

健介と紗枝の子供・亨（6）、鉄男が囲んでいる。

奥で紗枝（35）の調理する音。

亨「ねえ、お母さん、鉄ちゃんって、ワニに似てない？」

目が細くて、口が大きくてさ」

鉄男「なんだと。俺がワニだって！」

亨「そうだよ」

鉄男「そうか。俺はワニなんだ。

ワニなら、亨を食べなきゃならん。ワオー」

鉄男、亨を抱え込んで食べる真似。

亨、キャツキャツと笑いながら逃れようとする。

亨「お母さん、鉄ちゃんがひどいんだよ」

料理を運んできた紗枝、

紗枝「もうご飯よ」

鉄男「ウム、亨はまずいから食べるのは。やめた」

亨「何言ってるの。ボクはおいしいよ」

鉄男「そうか。おいしいか。

それじゃもう一度」

紗枝「もうそのへんで、おしまい」

健介「ワニのおじさん、お疲れでしょう。まあ一杯」

鉄男のコップにビールを。

鉄男「ああ、すみません、健介兄さん」

鉄男がビール缶を取って健介に注ぐ  
とすると、健介、手で止めて自分のコ

ップに注ぐ。

紗枝も席について、コップを差し出し、  
紗枝「私も一杯ちょうだい」

健介「あんたはあまり強くないから、ちょっとだよ」

紗枝「わかってるわよ。」

さあ鉄ちゃん、どうぞ召し上がれ」

健介「じゃ、乾杯」

三人唱和する。

亨「からあげおいしいね。僕毎日でもいい」  
紗枝「何言ってるの。このごろ鶏も高いのよ」

健介「鉄ちゃん、会社のほうはどう？」

鉄男「ああ、言い忘れてた。」

俺、嵐山精機辞めました」

紗枝「ええっ！辞めてどうするの。  
いい会社だっていつも言ってたじゃない」

鉄男「そうなんだけど。」

俺 JAXA に就職したんだ」

紗枝「ジャクサって？」

健介「ええっ。あの JAXA？」

紗枝「なんのこと？」

健介「日本宇宙開発機構のことだ」

鉄男「ほんとは宇宙航空研究開発機構っていうんだ。長ったらしいけどね」

紗枝「なんでまた！」

鉄男「いろいろあってね」

健介「いやあ、これはすごい。

なかなか入れないんだよ、あそこは。

臨時雇い？ 正社員？」

鉄男「正社員」

紗枝「なにがなんだかわかんない。

私心配になってきたわ」

健介「ふうーん。しかしめでたい、なあ亨」

亨「ワニのおじさんすごいね。JAXAだなんて」

紗枝「亨、あんた知ってるの？」

亨「テレビでやってたよ。

お母さん知らないの？

遅れてるう」

健介「心配しなくていいよ、最高の職場だから」

ら」

亨「鉄ちゃん、ロケットに乗るの？」

鉄男「さあ、どうかな」

亨「そのときは僕も連れてって」

紗枝「ダメなのわかってるでしょ、バカね。

ほんとはなにするの？」

鉄男「さあ」

紗枝「さあじゃないでしょ」

鉄男「実は俺もわからない」

紗枝「頼りないのね」

鉄男「うん。頼りない」

一同笑ってしまった。

それからそれへと話は続き、楽しみに

食事は続いてゆく。

○玉井家近くの小さな公園（夜）

紗枝と鉄男が歩いてくる。

紗枝「話してなによ」

鉄男「うん」

紗枝「なんか話しにくいこと？」

鉄男 「うん」

紗枝 「でも、黙ってちゃ分からないわよ」

鉄男 「そうだよね」

紗枝 「そうよ、話しなさいよ」

鉄男 「うん・・・」

姉ちゃん、俺、宇宙に行くんだ」

紗枝 「宇宙！」

鉄男 「マーズ7号って知ってる？」

紗枝 「あの朝刊に載ってた、故障した宇宙船

のこと？」

鉄男 「そう。JAXAの人に頼まれて、7

号を助けに行くんだ」

紗枝 「助けるって、どうやって？」

鉄男 「瞬間移動で」

紗枝 「ああ・・・」

二人とも黙ってしまう。

紗枝 「そんなことできるの？」

鉄男 「さあ」

紗枝 「宇宙って、危険なところでしょ？」

鉄男 「まあ、そうだけど」



紗枝「やめるわけにはいかないの？」

鉄男「・・・」

紗枝「姉ちゃんは、行って欲しくない」

鉄男「でも、56人の命が懸かっている」

紗枝「それは分かるけど」

鉄男「普通のロケットで行っても追いつけな

いんだ。

こんなときこそ、俺の能力を使う時だと思  
うんだ。

人に知られず、ひっそり生きてきたけど、  
もうそれも限界だ。

なんか人のためになることをしたい。  
助けられるかどうか分からないけど」

二人、また黙り込む。

紗枝「いいわ、行ってらっしゃい。」

死んだ母さんも喜ぶわ」

鉄男「ありがとう。」

それともう一つ。

このまま行ったら、もう帰ってこれられない」

紗枝「え？」

鉄男「火星と地球が一番近くなるのは、今から2年近く後だから、たとえ帰ってくる船があっても2年後。

そんな船ないんだけど。

だから、無事火星に着けば、そのまま火星で生きてゆくほかないんだ」

紗枝「もう帰ってこられないの？」

鉄男「うん」

紗枝の頬に一筋の涙。

紗枝「鉄ちゃん！」

泣きながら鉄男を抱きしめる紗枝。

鉄男も泣きながら、抱き返す。

鉄男「もう行かないと」

紗枝から離れる鉄男。

鉄男「これ」

と、小さな手提げ袋を渡す。

鉄男「さよなら、姉ちゃん。

いままでほんとにいろいろありがとう。

健介さんと亨ちゃんによろしくね」

紗枝「鉄ちゃん！」

泣き崩れる紗枝。

涙を拭いながら足早に去ってゆく鉄男。

○玉井家居間（夜）

奥の寝室で寝ている亨。

手で顔を覆って静かに泣き続ける紗枝。

健介、大きなため息をつく。

健介「そうか、今日はさよならを言いにく  
んだね、鉄ちゃん」

机の上の紙袋を開く健介。

中から、母の、手のひらサイズの手元

供養用の骨壺の袱紗ふくさと、銀行通帳と、

印鑑とクレジットカード。

それから暗証番号の書かれた紙片。

JAXAの特別生命保険の証書。

そしてアパートの鍵。

さらに手紙が1通。

開いて、声に出して読む健介。

健介「お姉ちゃん。」

今日から数えて1か月後。僕のアパートを  
引き払って下さい。

なにも惜しいものはありませんから全部  
捨ててください。

面倒ですがお願いします。

貯金は全部姉ちゃんにあげます。

(読み終えて) あいつ、死ぬ気・・・

と言いかけて、紗枝のほうを見て口を

つぐむ健介。

静かに夜は更け行く。

○ J A X A 筑波宇宙飛行士訓練棟減圧室(夜)

福井「鉄男君、どうだね、気分は」

鉄男「緊張してます」

福井「地球最後の風呂も入ったしね」

鉄男「もう、一生風呂には入れないんですね」

福井「うん。まあ、風呂に入らなくても生きて  
行けるから。」

山岳地帯に住む民族は、年に一回ぐらいし

か風呂に入らないそうだけど、ちゃんと生活していきける」

鉄男「そうですか」

福井「それからこの部屋は滅菌もやっている。

いかなるウイルスも船に持ち込まないため」

鉄男「福井さん、このマスクは？」

福井「寝るときにそのマスクで酸素だけを呼吸して、体から窒素を追い出す。

そしてこの気密室の気圧を、徐々に0.7にする。

その状態を翌朝2時まで保つ。

朝2時になったら、トイレ・食事を済ませる。

それからここに一緒に泊る町田君が、君に宇宙服を着せてくれる。

それから、宇宙服の気圧を、1時間かけて0.3にしてゆく。

それでおしまいだ」

鉄男「宇宙服を着るのに、そんなにかかるん

ですか」

福井「うん。きみの安全のためだ」

鉄男「映画で見ていると、宇宙服を着てすぐに船外活動するようですけど」

福井「そりゃあ、映画だから」

鉄男「そうなんですか」

福井「うん、そうなんだ。」

じゃ、町田君、後は頼むよ」

町田「はい、わかりました」

福井、部屋を出てゆく。

町田「これから長い夜が始まるけど、ゆっくりしてね」

うなずく鉄男。

町田「あ、それから、このオレンジジュースをどうぞ。」

宇宙船には酒や炭酸飲料は、持ち込み禁止なの。」

鉄男「そうなんですか」

町田「お酒は気圧が下がると悪酔いするから」

町田、ドアの向こうに。

鉄男、缶を開けて飲み始める。

しばらくしてかすかな声で歌い始める。

「河のほとりに ふたり坐れば

さざ波のかすかな 歌が聞こえる

黙ってこのまま そばにいてください

悲しい思い出 流してしまふまで

ずっと昔から 知っていたような

そんな気がする あなたが好きです」

谷山浩子・河のほとりに

こうして歌は続いてゆき、鉄男は目に

うつすら涙を浮かべながら、小さな声

で歌ってゆく。

曲が終わって、鉄男涙を拭う。

鉄男 M 「お母さん、本当にさよなら」

町田。部屋に入ってくる。

町田 「驚いたわね。こんな古い歌を知ってる

なんて」

鉄男 「亡くなった母は、古い歌が好きで、い

つも口ずさんでいました。

そのせいで、私も好きになりました。

歌うたびに母が思い出されます」

町田「そう。美しい歌ね」

鉄男「ええ」

○同（朝）

ポロシャツとスラックス姿の鉄男。

ドアを開けて町田が入ってくる。

町田「おはよう」

鉄男「おはようございます」

町田「どう？　よく眠れた？」

鉄男「ええ」

町田「トイレ、もういいわね？」

鉄男「はい」

町田「酸素マスクを外して。」

それから、この台に登って」

そこには宇宙服と、そのちょっと上に

鉄棒、後ろに踏み台。

鉄男、踏み台に上がる。

町田「その鉄棒を掴んで、靴を脱いでから両



足を宇宙服に入れて」

言われるままに宇宙服の中に滑り込む。

町田、背中のジェットパックを装着。

町田、鉄男の首に3センチ幅の帯をゆるく巻きつけ、それから伸びたイヤホン  
を鉄男の耳に。

町田「これは自動翻訳器。

君に話しかける人の言葉を判別して、自動で日本語にして、イヤホンに流すの。

君が日本語で話すと、相手の国語に変換して、のどのスピーカーから音声を再生。

一つ気を付けることは、大きな声で話さないこと。

大きな声だと、例えば日本語と英語が同時に  
出てくるから、相手が混乱するの」

鉄男「ああ、なるほど。

あの、同時に複数の言語で話しかけられたら  
どうなるのですか？」

町田「その時は、一番使用頻度の多い言葉で

応答します。

多分英語ね」

町田がヘルメットを被せ、固定する。

町田「呼吸はその中のマスクでね」

マスクが鉄男の鼻から口を覆う。

町田「今から、宇宙服の気圧を0.1に落とし  
ていきます。

その椅子に座って楽にしていね。  
なにかあったら声をかけてね」

○ J A X A 宇宙飛行士訓練棟・屋上（早朝）

ほの暗い空。

屋上の扉から、福井と町田に付き添わ  
れて、宇宙服を着た鉄男、電動カート  
に立ったまま乗って出てくる。

福井「もうすぐ8号が右から登ってくる。

訓練のタイミングを思い出してレポート  
するんだよ。

失敗したら、ここへ戻ってくればいいから」

鉄男「はい。だいじょうぶです」

町田「無理するんじゃないわよ。

わかった？」

鉄男うなづく。

福井「あ、それからね、さっき連絡があったんだけれど、8号にはすでに3人乗組員がいるんだそうだ」

鉄男「え、そうですか。」

それは心強いなあ。

どんな人たちですか？」

福井「いやあ、短い通信だったからそこまで  
は分からない」

町田「あ、登ってきた」

薄明るくなりつつある夜明けの空を背  
景に銀色に光る2つの点。

ISS3とマーズ8号が山々の間か  
らゆっくり移動。

角度が80度ぐらいになったとき

福井「今だ！」

鉄男の姿は消える。

○地上 380 Km 上空（朝）

鉄男 忽然と現れる。

そしてすぐに落下し始める。

右上空に 8 号の姿が。

鉄男、再びテレポート。

○地上 390 Km 上空（朝）

鉄男の横を巨大な 8 号が高速で通り

過ぎようとする。

鉄男「秒速 8 キロ！」

鉄男、さらに 8 号を追いかけてテレ  
ポート。

○地上 400 Km 上空（朝）

一瞬、8 号の先端のエアロックを確

認して再びテレポート。

エアロックの前に近づいた鉄男。

鉄男「今だ！」

鉄男、消える。

○マーズ8号着陸船のエアロックの中（朝）

現れた鉄男、激しく壁に背中から激突。  
呼吸が出来ない。  
目の前が暗くなる。  
そして失神。

3時間後、目を開く鉄男。

体を起そうとして、背中に激痛が。

それでも我慢して、泳いでエアロック  
の入り口に。

緑に光る大きなボタンを叩く。

すると隔壁が開く。

○エアロックの外（朝）

エアロックのボタンを押して閉じる。

鉄男、痛みを堪えて鉄棒の前に来る。

練習通り宇宙服を脱ぎ、並んでいる宇

宙服のそばに置く。

そばにあったスキッパーシューズを履

き、操縦室へと続く筒状の通路を泳ぐ。

○マーズ8号着陸船・操縦室（朝）

ステファニー・ミラン（医師・32）

が操作卓の前に。

空気の流れて誰かが下りてくるのがわかる。

彼女の髪の毛がそよぐ。

ステフ「ジョンなの？」

鉄男泳ぎ出る。

鉄男「こんにちは」

ステフ「何言ってるの。」

声がおかしいわよ？ ジョン

と言って振り向くと鉄男の姿が。

ステフ、席を離れて、空中を回転しながらシート影へ。

ステフ「だ、誰なの！」

鉄男「はじめまして」

ステフ「なに？ どこから来たの！」

鉄男「地球から来ました」

ステフ「あなた、誰？」

鉄男「申し遅れました。鉄男と申します」

ステフ「テツツオ？」

ヒュー斯顿から連絡のあった、あなたが

テツツオ？」

鉄男「そのようです」

ステフ「うそ、信じられない！」

鉄男「その気持ちはわかります」

ステフ「どうやって来たの？」

鉄男「宇宙服を着て」

ステフ「ロケットは？」

鉄男「使いませんでした」

ステフ「テレポーション！」

鉄男「そうです」

ステフ「ほんとだったんだ！」

そのとき、鉄男の背中が壁に触る。

鉄男「うっ」

ステフ「どうしたの？」

鉄男「エアロックで壁にぶち当たってしま

ました」

ステフ、鉄男のそばへ泳いできて、

彼のポロシャツをめくりあげる。

背中が赤くなっている。

ステフ、そっと触ってみる。

鉄男、うめく。

ステフ「たいへん！　ホイールに降りましよう」

鉄男の腕を掴んで、壁のスポーク入口に連れてくる。

緑のボタンを押して隔壁を開く。

足から彼を入れ、支持金具を掴ませる。

自分もその傍に入る。

ステフ、ベルト駆動スイッチを入れる。

ステフ「あなた、なんかいい匂いがするわね」

鉄男「え、ああ、こちらに来る前に風呂に入ってきたから」

ステフ「風呂！　いいわね。」

風呂だって。

風呂には入れるなら1万ドル出してもいいわ」

鉄男「はあ」



ステフ「私、なにか臭うでしょ」

鉄男「いいえ、なにも」

ステフ「うそ、4年も風呂に入っていないのよ」

鉄男「しいて言えば、花の香り・・・」

ステフ「あなた、優しいのね」

顔を赤らめる鉄男。

○スポーク内（朝）

二人の体は、徐々に下に押し付けられ、人口重力が効いてくる。

ステフ「回転するホイールの中は、火星と同じ重力で、地球の4割弱」

ものの2分もしないうちに、スポークの隔壁がスライドして開く。

外へ出て緑のボタンを押して隔壁を閉じる。

○回転ホイール・医務室（朝）

ステフ、鉄男を背もたれの無い椅子に座らせ、超音波診断装置と触診で診断

を続ける。

ステフ「骨は折れてないから打ち身ね。

内臓も大丈夫。

炎症用の薬を塗るわ」

壁の引き出しから軟膏を取り出し裸の

鉄男の背中に塗る。

うめく鉄男。

ステフ「この痛み止めを飲んで」

錠剤とチューブの水を渡す。

鉄男、薬を飲み、チューブの水を全部

飲み干す。

ステフ「遅くなったけど、自己紹介。

この船のゼネラルクターの、ステファニ

ィ・ミラン。

ステフって呼んで」

鉄男「ゼネラルドクターってなんですか？

聞いたことないけど」

ステフ「一つの宇宙船に、外科医や内科医、

婦人科医、整形外科医なんかたくさん乗せ

るわけにはいかないの。

だから主な疾患を一人で診断治療する医者  
が要るの。

それがゼネラルドクター」

鉄男「へえ、頭がいいんですね、あなたは」

ステフ「そうよ、私は頭がいいの」

と笑う。

ステフ「さてと、今何時？」

壁の時計を見る。

ステフ「9時すぎ。」

行きましょう。

みんなを紹介するわ。

あ、その前に、今から行く操縦室に、私の

3歳の娘キャリアがいるの。

その子が（あなたは私の父ちゃん？）て

聞いたら、そうだと言って欲しいの。

訳はあとで説明するから。

お願いね」

鉄男、訳が分からず返事が出来ない。

二人は、いくつもの部屋を通り過ぎ、

操縦室に入る。

○ 回転ホイール操縦室（朝）

ステフと鉄男入ってくる。

部屋の床は薄い緑色。

上下２段、左右２連のベッドルームのその前に、固定された横長のテーブルと、やはり固定された椅子が６脚。そこに少女とアフリカ系の老人が座っている。

予想と外れた乗組員の構成に驚く鉄男。

キャリー・ミラン（３）「ママ、そのひとだれ？」

鉄男「こんにちは」

キャリー「あっ、あなた私のダディでしょう？」

ねえ、そうでしょ？」

ステフ、肘で鉄男の脇腹をつつく。

鉄男、痛さに顔をしかめながら

鉄男「そうだよ。私が君のダディだ」

キャリー「わーい。ダディだ、ダディだ！」

椅子から立ち上がり、鉄男に抱きつ

く。

鉄男、たじたじとなる。

ジョン・ダーウエル（76）「この人は？」

ステフ「テッツオさん。」

昨日連絡のあったテレポーター・ジョン・マ

ン。

テッツオさん、この人はジョン・ダーウエ

ル。

世界に食料を供給しているコズミック・フ

ード・サプライの元CEOよ」

ジョン「ほう、ほんとだったんだね。」

いや、驚いた！」

ステフ「テッツオはエアロックで怪我をした

けど、大丈夫、手当てしたから。」

さっきの薬、睡眠作用があるから、少し

横になって、休んでね」

ステフ、下のベッドルームのドアを開

き、鉄男に中に入るよう促す。

中は大人3人がゆっくり寝られる広

さと、楽に座ることのできる高さ。

鉄男、そこに下向きに横たわる。

ベッドのドアを閉じるステフ。

キャリアー「つままない、ダディ寝ちゃって」

ステフ「無理言わないの。

ちよつと寝たら起きるから。

私、ヒューストンに連絡する」

と立ち上がり、操作卓のほうへ。

ステフ、通信機のスイッチを入れる。

モニターにミッション・コントロール

ル・センターの全景が。

そしてマクニールが画面右から入り込む。

マクニール「How did it go?

Did he arrive? 」

字幕（どうだった?

彼は到着したかね? ）

ステフ「Yes, he showed up just now.

字幕「はい、さっき現れました」

マクニール「Wow, it was true.

I was actually skeptical.」

**字幕**（いやあ、ほんとだったんだね。

実は半信半疑だったんだ）

ステフ「I was surprised too.

I thought it was a Houston's joke」

**字幕**（私も驚きました。

てっきりヒューストンのジョークだと）

マクニール「Then tomorrow morning,

let him teleport to the moon.

Report back to me.」

**字幕**（じゃあ、明日、月までテレポートさ

せてくれ。

報告を頼む）

ステフ「Yes、Ser

Now then, here we go.」

**字幕**（はい、じゃあこれで）

○ 操縦室（夜）

4人がテーブルを囲んでいる。

食べ物、ラッピングされたり、チューブやカップに入っているもの。

鉄男、はさみでラップを切り、中の、さばの味噌煮を、箸でつつく。

続いて開いた白米のパックから一口。そばには、カップに入ったほうれん草

とわかめのスープ。

ステフ「それにしてもよく寝たわね、10時間」

鉄男「ええ、薬が効きました。

痛みもほとんど収まりました」

キャリー「ダイ、これ食べる？」

鉄男「君は優しいね。

それはなに？」

キャリー「ブリトーよ。

知らないの？」

鉄男「ああ、ブリトーね。

聞いたことあるけど、食べたことないな。

おいしいの？」

キャリー「ママ、おいしいかだって。



おかしいね」

ステフ「そうね」

ジョン「君はイタリア人なのに日本食が好き

なのか？」

鉄男「なんで私がイタリア人？」

ジョン「だって、テツツオってイタリアっぽ

いから」

鉄男「正しくは、テツツオじゃなくて、テ・

ツ・オです。

私は日本人です。

日本人の名前はほんとは一字づつ意味が

あるんです。

私の名前のテツは、金属の鉄。

オは男のこと。

英語に直訳すればアイアンマン」

キャリー「ママ、アイアンマンだって」

ジョン「そうか、君がアイアンマンか。

これからそう呼ぼう」

キャリー「アイアンマン、アイアンマン！」

鉄男「やめてください。

テツツオのほうがましです。

それよりも、ダーウエルさん。お仕事に  
関連してぜひお聞きしたいことがあります」

ジョン「ジョンでいいよ。

なんだね」

鉄男「あの、このまま順調にいくと、私たち  
はずっと火星で生活するんですよね」

ジョン「そうだよ」

鉄男「私が今一番心配しているのは、火星で  
お米が食べられるのかということですよ」

ジョン「君は楽天的だね、いや、結構。

命の心配より食事の心配。

いいね、気に入った。

結論から言うと、小麦のほうが食材のバリ  
エーションが広いから、そちらを優先する  
ことになる」

鉄男「バリエーションと言うと？」

ジョン「小麦からは、パン、麺、パスタ、ピ  
ザ、ナンなどたくさん種類のレシピが利  
用できるから」

鉄男「ああ、そうですね、それは残念」

ジョン「いや、そんなに悲観することはない。

移住者の25%は米が主食のアジア系だから、いずれ稲も生産することになる」

ステフ「でも稲って水田で作るのよね。

そんな水はどこから？」

ジョン「水田で使うほどの水は、最初は手に入らないから、田畑で作る稲が利用できる。

菌根菌を使った稲作だ」

鉄男「なんだかよく判りません」

ジョン「いずれにしても水は必要だ。

今、火星の水を利用するプランが実行されている」

鉄男「その話はJAXAの方から聞きました」

ジョン「ほう、そうかね」

鉄男「JAXAで、火星の日照量は地球の4割程しかないと教わりましたが、それで作物は育つのですか？」

ジョン「そのままではダメだから、二酸化炭素と水から酢酸塩を作り、これで人工光合

成を稼働させる。

この方法だと、少ない日照量でも植物は育つんだ。

とりあえず、しばらくの間はジャガイモやサツマイモなどのイモ類や、大豆などの豆類や野菜が主食になる」

鉄男「ちよつと淋しいですね」

ジョン「そのうち慣れるよ。」

多分子供のほうが早く順応するだろう」

ステフ「気が遠くなりそうな話だわ」

ジョン「なに、慣れれば平気だよ、なあ、キヤリー？」

キヤリーが鉄男にウインクする。

鉄男もウインクを返す。

キヤリーがキヤツ、キヤと笑う。

ステフ「キヤリー、歯を磨いてね」

キヤリー「うん」

キヤリー、歯磨きペーストのついていない歯ブラシで歯を磨き始める。

磨き終わると、コップ一杯の水を飲む。

そしてキャリーは、寝室のドアを押し開き中へ入り、ベッドに座る。続いて、リモコンで正面のモニターの電源を入れる。

慣れたもので、ライブ러리からアニメーションを選び、再生する。

ステフ「音が大きいわよ」

キャリー「はい」

鉄男、お茶をチューブから飲む。

鉄男「あの、最初皆さんに会ったとき、びっくりしました」

ステフ「なんで？」

鉄男「乗組員3名と聞いていたので、屈強な男性3名だと思ひ込んでいました。

ところが、来てみると女性と子供と老人・・・、あ、すみません、壮年の人だったんで。

一番ありそうにないパターンだから」

ジョン「そうだな。

理由を知らないと驚くよなあ」

ステフ「ジョンは最初から8号の火星移住者に登録していて、一足先にISSに。  
ところがマーズ8号の出発が延期になっ  
て」

ジョン「もうすでに8号に乗り組んでいたから、2年先までここで暮らすことになって  
ね」

ステフ「ISSってやっぱり手狭なの。」

それに、ここにはありがたい重力もあるし」

鉄男「へえ、で、あなたは？」

ステフ「私の話は（ささやき声で）キャリアー  
のいないときに」

キャリアー「なにか言った？」

ステフ「何でもないわ。」

（ささやき声で）ほんとに耳がいいんだか  
ら」

3人、笑ってしまう。

○鉄男のベットルーム（朝）

クラシック音楽が静かに流れ始め、

鉄男目覚める。

コンコンとノックする音。

キャリー「Daddy, wake up.

It's morning.」

字幕（ダディ、起きなさい、朝よ）

鉄男「えっ」

鉄男、自分がどこにいるのか、一瞬戸惑う。

やっと気づいて、翻訳器を首にかけ、

寝室のドアを開く。

キャリーがのぞき込んで笑いかける。

キャリー「朝よ。早く起きないと」

鉄男「ああ、おはよう」

キャリー「さあ、早く！」

寝室から出ると、ほかの2人はもう起きて  
きている。

鉄男「えっ、今何時ですか」

ステフ「協定世界時で朝6時」

鉄男「ああ、そうですか。」

なにか、時間がよく分からない」

ジョン「宇宙へ来ると、みんなそうなる。

だいたい朝日が差してこないからね。

第一この宇宙船には窓がない」

ステフ「さあ、体操よ」

鉄男「はあ」

曲が流れ始め、3人が体操を始める。

鉄男も真似して始める。

日本のラジオ体操に似た部分もあるが、

太極拳そっくりの、ゆっくりな動作が

多い。

10分くらいで終わる。

鉄男「朝必ずやるんですか」

ステフ「そう、生活リズムを維持するためよ。

さあ、次はウォーキングよ。

リンカーン、ホイールのすべての部屋の隔

壁をオートモードに。

あ、リンカーンっていうのは、この船の人

工知能」

キャリー「私、ダディと手をつなぐ」

と言って、鉄男の手を取る。



ステフ「これも日常リズムの一環。

低重力だから、決して走ってはダメよ。

ホイール一周350mで6周、約2Km。

ほんとはその倍は歩きたいけど、キャリ

ーのことを考えて、しばらくはこのペース  
で」

こうして4人はゆっくりと歩き続ける。

居室ごとに床の色が違って、虹の7色

にパステル調に塗り分けられている。

ステフとキャリー、歌を歌い始める。

4周半ばで、キャリーがむずかる。

キャリー「ママ、もう歩けないよ」

ステフ「まあ、困ったわね」

鉄男「私がおんぶしましょう」

ステフ「そんなの悪いわ」

鉄男「いや、大丈夫です。

キャリー、ダディの背中に乗って」

キャリー「(ニコニコと)はーい」

キャリーは鉄男の背中に乗って体を上

下させる。

鉄男「そんなに動いたら危ないよ。

おとなしく乗ってなさい」

ステフ「そうよ、ダデイの言うこと聞かなく  
っちゃ。

わかった？」

キャリー「うん」

それでも体をゆするキャリー。

そして彼女の体が鉄男の手をすり抜け

下へ。

咄嗟にキャリーは鉄男のスラックス  
を掴む。

そのため、ブリーフごとスラックスが  
脱げて、お尻が少し見える程に。

気付いた鉄男はすぐスラックスを  
持ち上げる。

鉄男「キャリー、なんともない？」

ステフとジョンはクスクス笑い。

そのうちこれが大笑いになって、笑い  
が止まらない、

鉄男「なんですか。

何がおかしいんですか？」

それが笑いを煽<sup>あお</sup>り、キャリーもなんだか  
わからずに笑い始める。

鉄男もつられて笑い出す。

キャリーを今度は前で抱き、

鉄男「おかしな人たちだなあ」

ジョン「宇宙に来てこんなに笑ったのは初めてだ」

○ホイール・操縦室

ステフ「ところでテツツオ、朝食はなにが食べたい？」

鉄男「ああ、何でもいいですが・・・。

でも、みそ汁とおにぎりと焼き鮭があれば」  
ステフ「そう」

ステフ、隣の資材庫へ入って行き、トレイにいろいろな食材を乗せて戻ってくる。

鉄男の前には、リクエストどおりの食

材。

見ると、3人は、ラップされた容器に  
コーンフレークを入れ、そこに水で溶  
いた粉末ミルクを注ぎ、副菜に野菜の  
ソテーとハム。

鉄男「へえっ、ずいぶん軽いですね」

ステフ「あのね、ここでは運動量が少ないか  
ら食べ過ぎは禁物。

かと言って、食べないと、急激に体が衰え  
るの。

つまり、量より質ね」

鉄男「へえ、じゃ、この私の食事は・・・」

ステフ「あなたは別。

しっかり食べてね」

3人、食事を始める。

○着陸船・操縦室（朝）

ステフ「さて、テツツオ、テレポーターシヨ  
ンの能力を見せてもらいましたようか」

鉄男「どうやるんですか？」

ステフ「そこの真ん中の操縦席に座って」

いわれるままに座る鉄男。

ステフ、鉄男のシートベルトを締める。

ステフ「右の席に座って、ジョン」

ジョン「おう」

ステフ「キャリー、あなたはダディの横」

キャリー「うん」

その横にステフが座る。

全員シートベルトを締め終わる。

ステフ「リンカーン、正面のモニターにカメラに映った月を表示して」

大きなスクリーンに真っ暗な宇宙が広がりがり、真ん中に月が。

ほとんど地上で見ている大きさ。

そして画面の下中央に、なにやら鋭いものが写っている。

鉄男「あの尖がったものはなんですか？」

ジョン「あれはマーズ8号の、着陸船の先端部分。」

この映像は、我々の真上に取り付けられた

カメラで撮影している」

ステフ「マクニール博士によると、あなたは月まで跳べるそうね」

鉄男「さあ」

ジョン「地上から8号まで跳べたのだから、可能性はある」

ステフ「とにかくやってみて。

遅れると、月が視界から消えてしまう。

なにしろ、地球も月もこの船も、みんな動いているから」

鉄男「・・・はい。

あの、手をつないでもらえませんか。

テレポーターションを確実にするために」

4人隣り合って手をつなぐ。

ジョンとステフは、一方の手で座席のアームをしっかりと掴む。

鉄男、心を静めて月に意識を集中する。

右に少しずつ移動する月。

静まり返る機内。

鉄男、月が移動したあとの空間に意識

を集中。

鉄男、空間を折り曲げて月を引き寄せ  
る。

次の瞬間、スクリーン右半分に月の表  
面が大きく表示される。

ステフ「リンカーン、月の画像を拡大した  
の？」

リンカーン「いいえ。そこに見えているのは  
カメラからの原寸画像です」

ジョン「ええ？」

ステフ「やった！ やったのよ！」

キャリー「ママ、なんのこと？」

ステフ「あれはね、ほんとの月よ。

やってきたのよ、月まで」

ジョン「驚いたな！ こんな事があるなんて」

ステフ「テツツオ！ よくやったわ。

え？ どうしたのテツツオ」

鉄男、首を座席の後ろに大きくのけぞ  
らし、荒い息をしている。

顔が赤い。

ステフ、ベルトを解除して鉄男を持ち上げる。

額に手を当てる。

ステフ「まあ、たいへんな熱！」

ジョン「どうしたんだ」

ステフ「なにかおかしいの。

手伝って、ジョン。

部屋まで運ぶから」

ジョン「わかった」

鉄男の体は宙に浮く。

その体を引っ張ってホイールへのスポーク入口へ。

後ろをついてゆくキャリー。

○ホイール・医務室

ステフとジョン、鉄男をベッドに横たえる。

キャリー「ダイどうしたの？」

ステフ「あのね、ちょっと病気なの。

その椅子に座っていてね」



キャリー「うん」

ステフ、診療を始める。

ジョン「ちよつと気になることがあるから」

ステフ「え？」

ジョン「ちよつとね」

といいながら、部屋を出てゆく。

しばらくして鉄男、気が付き、周りを

見回す。

ステフ「あ、気が付いたのね、よかった」

鉄男「一体どうしたんですか？」

ステフ「あなた、気を失っていたのよ」

キャリー「ダデイが起きた！」

ステフ「テツツオ、動かないでね。」

あなた、熱が出て、脱水症状なの。

今、点滴しているから。

それからこれが解熱剤」

と点滴チューブを連結する。

鉄男「今まで倒れたことないのに」

ステフ「それほどテレポーテーションって、

エネルギーを使うものらしいわ。

しばらくそのままできてね」

鉄男「それでレポートできたんですか？」

ステフ「左のモニターを御覧なさい」

鉄男、モニターを見やり

鉄男「あ、月！」

ステフ「成功よ。」

けどね、医者立場から言うと、もう少し調べてないと、動くことはできないわ。

結果が出るまで安静にね」

キャリアー、心配そうに鉄男の手を握る。

ステフ「キャリアー看護師さん、

ダイをよく見ていてね。

ママ、お仕事があるの」

キャリアー「はい」

ステフ、部屋を出てゆく。

### ○ ホイール操縦室

ジョンがモニターを見ながら考え込んでいる。

いろいろな数式が。

泳いでくるステフ。

ジョン「How was it?」

字幕（どうだった?）

ステフ「Just realized.

But he still have a fever.」

字幕（気が付いたけど、まだ熱があるの）

ジョン「Hm」

字幕（ふーん）

ステフ、通信機の電源を入れる。

ステフ「Houston, Houston, over here.

Mars 8, come in.」

字幕（ヒューストン、ヒューストン、こち

らマーズ8号、どうぞ）

しばらくしてモニターにマクニールの顔が。

マクニール「This is Houston.

You made it to the moon!

Thank God!」

字幕（こちらヒューストン。

月まで行ったね！ よかった！ )

ステフ 「We was successful,  
but Tethuo...collapsed.

He is now undergoing treatment.」

**字幕** (成功はしたんですけど、テツツオが倒れてしまいました。

今治療中です)

マクニール 「Well, that's worrying.」

**字幕** (ああ、それは心配だ)

ステフ 「So, while he's resting, we want  
to move Mars8 while he rests, Over」

**字幕** (それで、彼が休んでいる間、8号を火星へ移動させたいんですけど、どうぞ)

マクニール 「Yes, let's do that.

I'll have Lincoln program the plasma  
beam to fire and receive immediately.

You don't have to do anything. Over」

**字幕** 「そうしよう。

プラズマエンジンの駆動をリンカーンにす  
ぐプログラムさせる。

そちらは何もなくていい、どうぞ」

ステフ 「I understand.

I will contact you again if there is any  
change in him. Over」

**字幕** （わかりました。

彼に変化があったらまた連絡します。  
連絡終わります）

マクニール 「Copy that. Communication  
complete.」

**字幕** （了解。通信完了）

モニターが消える。

ステフ 「What are you doing, John? 」

**字幕** （なにしてるの、ジョン）

ジョン 「I'm not sure.

I'll let you know when I do."」

**字幕** （よく分からないんだ。

分かったら教えるよ）  
首をかしげるステフ。

T 「翌日」

○ホイール操縦室（朝）

4人は朝食を終え、お茶を飲んでいる。

ステフ「テツツオ、今日はどうか？」

鉄男「ええ、まあ、何とか」

ジョン「何とかじゃあ心配だなあ」

キャリー「大丈夫よ、ダディには私がついて

るから心配しないで」

ステフ「それは心強いわ。」

今日は歩くの止める？」

鉄男「いや、歩きましょう。」

そのほうがいい」

○着陸船操縦室（朝）

操縦席の鉄男。

彼の頭に柔らかいゴムのようなキャツ

プを被せるステフ。

そして彼の額や頬に手を当てる。

ステフ「このヘッドキャップは頭の冷却用。

一緒に脳の血流も調べます。」

昨日のことで心配になって用意したの」

鉄男「ありがとうございます」

ステフ「さあ、今日は・・・」

鉄男「リンカーン、モニターに、火星までの軌道を。」

それから赤緯と赤経をワイヤー表示して」

星々の間を遠くに伸びた赤い線と、細かい縦横のワイヤーが描かれる。

鉄男「その赤い線の先端が火星？」

リンカーン「はい」

鉄男「上のほうに光っているのは、みずがめ座のサダルスード？」

リンカーン「はい」

鉄男「下のほうの明るい星はクジラ座のデネブカイトス」

ジョン「星座のこと、よく知ってるね」

鉄男「これが私の趣味ですから」

ステフ「大学で勉強したの？」

鉄男「いえ、私は高校しか出ていません」

ステフ「へえ」

鉄男「これで大まかな位置がわかりました。

それでは、ここから38500Kmの7号軌道上に、昨日の月の画像を同じ大きさで表示して」

リンカーン「はい」

鉄男「じゃ、昨日と同じだけテレポートしてみます。」

あの感覚は覚えていますから」

ステフ「みんな、ベルトをもう一度確かめて」

鉄男「じゃ」

静かな時間が流れる。

瞬時に空間を歪め、ジャンプ。

直ちにモニター上の月が消える。

ジョン「成功？」

ステフ「そのようね。」

後ろの画像を見てみましょう」

ステフ、カメラの切り替えノブを。

モニターには、後方のパラボラ越しに

影になった月が

ステフ「月の裏側が見えてる。成功ね。」

テツツオ「大丈夫？」



鉄男「ええ」

ステフ「じゃ、みんな休んで。

私は今から、ヒューストンに連絡を取るから」

鉄男、ベルトを解いて離れようとする  
と、よろける。

ステフ「大丈夫？」

鉄男「ええ」

ステフ「ジョン、テツツオにタンパク質とビ  
タミン類をたくさん摂らせて」

ジョン「まだ朝9時だけ」

ステフ「この人は、1日5回食事しないと  
けないみたい。

昨日の検査でアミノ酸が大量に失われて  
いたの」

ジョン「わかった」

ステフ「キャリー、あなたもダディの世話を  
してね。ママはお仕事があるの」

キャリー「うん」

○ホイール操縦室

鉄男、ポリエチレンに包装されたスクランブル・エッグとベーコンと粉末牛乳を水で溶いたものをたிரける。

ジョン「さあ、ビタミンたっぷりの野菜ジュース」

鉄男「ありがとうございます」  
そばでキャリーがあきれ顔で見つめている。

キャリー「ダディ、そんなに食べてお腹痛くならない？」

鉄男「さあ」  
ジョン「ダディはね、さっき大仕事をしたから、とてもお腹が減ってるんだよ」

キャリー「座っていただけで何もしていないよ」

ジョン「そうだ、そうだよね」

鉄男「ごちそうさまでした。ちよつと横になつてきます」

ジョン「ああ、そうするといい」

キャリー「私が歌を歌ってあげる」

と、鉄男の手を引いてベッドのほうへ。  
ベッドに横になり目を閉じる鉄男。  
キャリー、ベッドにもぐりこんで、  
鉄男の耳元で歌い始める。

歌は *wheel on the bus*

キャリー「The wheels on the bus go round  
and round

Round and round, round and round

The wheels on the bus go round and  
round

All through the town

All through the town・・・」

そうしているうちに二人とも寝てしま  
う。

しばらくしてステフ帰ってくる。

ステフ「Whats? Where's Carrier?」

字幕（え？ キャリーは？）

ジョン「They're both sleeping.」

字幕（二人とも寝ているよ）

ステフ、ベッドの扉を開く

と、二人とも身を寄せ合って寝ている。

ステフ「Okay, me too.」

字幕（じゃ、私も）

と、キャリーの横へ潜り込む。

ジョン「what the hell」

字幕「なんてこった」

1時間ほどして、鉄男目を覚ます。

横を見て、キャリーとステフと一緒に寝ているのを見て驚く。

鉄男「え？」

ステフ、目を覚ます。

ステフ「おはよう」

鉄男「あ」

小さい声で話し出すステフ。

ステフ「あなたに最初会ったとき、キャリーの  
ダディだと言わせたこと、謝るわ。」

この子のダディは、ISSで私と恋愛の末、  
帰還船で先に地球に帰ってしまって、その

あと妊娠がわかって・・・」

鉄男「宇宙での出産って、初めて？」

ステフ「そう、馬鹿な妊婦第一号よ」

鉄男「次の帰還船で地球に帰ればよかったのに」

ステフ「そのとき帰還船の出発はずーっと先。

妊娠中、一番こわいのは宇宙放射線。

ISSで、もう十分浴びていたの。

それを避けられるマーズ5号が発発間近だったのだから、それに乗せてもらったの。

そうして5号が火星に出発して250目に生まれたの。

結局、キャリーの体が着陸に耐えられるまで、マーズ号で生活することになったの。マーズ5号で1往復、合計3年近く生活してきたわ」

鉄男「でも、マーズ号母船は、地球に帰ると

きは、誰も載っていないでしょう？」

ステフ「そうよ。

私とキャリーだけ」

鉄男「食料や水はもう残っていないなかったんじゃないですか？」

ステフ「いいえ、最悪の状況を考えて、1年分の備蓄は用意されていたの」

鉄男「寂しくなかったですか？」

ステフ「ええ、着陸船が火星に向かってしま  
うと、ほんとに寂しかった。

最初、気が狂うのかと思ったけど、慣れてくると、なんとか耐えられるものよ。

キャリアの世話もあったし、ヒューズトンとの連絡事務も。

それから退屈しのぎにコンピューターと会話したり、映画を見たり、デジタルブックを読んだり」

鉄男「あなた、強いですね」

ステフ「私は我慢できても、キャリアは、そうはいかなかったわ。

2歳ぐらいになると映画に出てくるお父さんや兄弟のことが気にかかって。

それで物心がつき始めたころから（私のダ

デイは？」って尋ね始めて・・・」

鉄男「そうでしたか。

それなら、しばらくダデイでいましょう」

ステフ「そうしてくれる？

そうならありがたいわ」

鉄男「地球に帰るにはどのくらい時間が」

ステフ「地球に無事着陸しても、骨や筋肉が

弱いから、この子はたぶん歩くことができ

ない。

ほら、足もこんなに細い」

キャリーのストラックスをめぐり上げ

る。

ステフ「だから一生ベッドで暮らすことになる。

それだったら、重力の少ない火星のほう

が・・・」

鉄男「よくわかりました。

いい判断だと思います」

ステフ「その代わりと言ったら変だけど、こ

の子、3歳なのに、知能は6歳くらい」

キャリアー「うーん」

ステフ「あ、起きたのね。

今日のお勉強がまだよ。

始めましょう」

そのとき、スピーカーからリンカーンの声が。

リンカーン「ヒュー斯顿からの緊急連絡です」

ステフ「なにかしら？」

ベッドルームから出た3人。

ステフ、通信スイッチを入れる。

モニターに、ミッシヨン・コントロール

ルセンターを背景に、マクニールが現れる。

マクニール「やあ、驚かせてすまない。

懸案事項が現実になったんで呼び出した」

ステフ「懸案事項って」

マクニール「最初から説明しよう。

鉄男さんのレポートをNASAで議論にかけたとき、最初誰も信じてくれ



なかった。

それでもあのC130のレポートのセル  
ライフォン録画を見せて、なんとか・・・。  
そして昨日の月までのレポートでみんな  
納得がいったんだが、しかし別の問題が」  
ステフ「別の問題って」  
マクニール「それは、レポートーション先  
の、位置の正確さなんだ。

鉄男さんはコンピューターじゃないから、  
厳密なジャンプは出来ない。

昨日の月までのレポートでは、月からは、  
300Km離れていた。

月に激突を避けたと思えば、まあ範囲内と  
言える。

しかし、今朝のジャンプでは、距離は合格  
だったが、位置は大分ずれていた。

ずれているのは、姿勢コントロールエンジ  
ンで補正が効くが、スタッフの中から、毎  
日エンジンをふかすと、燃料が足りなくな  
るといいう指摘が出てきた。

それはそのとおりなんだ。

それで、お願いなんだが、鉄男さん。

宇宙船の姿勢制御もエンジンを使わずに

君のサイコキネシスでできないか？」

鉄男「物を動かすのは楽ですが、しかし、

正確になると・・・」

マクニール「こちらのスタッフが、そのプロ

グラムを組み立てた。

それは、補給船がドッキングするときの、

昔の二重像合致式の視覚誘導なんだ。

いまからモニターにそれを表示する」

モニターに進行方向の星空が。

その上に、細い大きな赤い十字が、マ

イズ8号の先端に重なって表示され、

さらに別の位置に緑の十字が。

マクニール「赤い十字が現在の位置。

緑の十字が、火星への軌道の正しい向き。

鉄男さん、目の前の固定された操縦桿に手

を添えて、機体の赤十字を緑十字を重ねて

みて欲しい」

鉄男「これってずいぶんアナログですね」

マクニール「テレポーターション自体がアナログだよ」

鉄男「そりゃあそうですけど」

マクニール「とりあえずやってみてくれ」

一回目、近くはなるが重ならない。

二回目、かえって下へ下がりがすぎる。

三回目、縦は揃ったが横がずれる。

鉄男「難しい」

ジョン「みんなが見ていると気が散るから、

ステフ、キャリーと一緒に散歩に行ったほ

うがいい。

このくらいの修正は全員いなくてもいい

ようだ」

ステフ「そうね、そうするわ。

テツツオ、深呼吸してね」

鉄男「うん、ありがとう」

ステフ、キャリーを連れて外へ。

ジョン「これで気持ち became 楽になっただろう。

君はステフの前では緊張しなくなりだから」

鉄男「え？」

ジョン「集中、集中」

こうして小一時間作業が続く。

鉄男「重なった！」

ジョン「おお！」

そして2時間後

マクニール「成功したね。」

これであとプラズマビームエンジンで軌道に  
戻れる！

鉄男さん、ありがとう。

これがだめなら、そこから地球への帰還命令を出すところだった。

ほんとに良かった。

これから毎回テレポートした2時間後、地球と月の天文台からの新しい軌道計算に基づいて、姿勢コントロールをやって欲しい

鉄男「わかりました」

○ホイール・ルームA（夜）

鉄男が操縦室から入ってくる。

すると、ステフとジョンがなにか飲んで  
いる。

ジョン「あ、いいところへ来た。

一杯やろう」

と、紙コップに茶色い液体を注ぎ、

鉄男に差し出す。

鉄男「え？ 何ですか。

あ、ウイスキー！」

ステフ「そうよ。

ジョンが持ち込んだの」

鉄男「これって禁止されてましたよね」

ステフ「そうなんだけど、長い航海で心の安

定には効果抜群よ」

鉄男「お医者さんが言うのなら」

と一口。

鉄男「おいしい！」

ステフ「そうなんだけど、ほんとに飲み過ぎ

はよくないから、日曜日と、水曜日に1杯

づつね。

わかった？」

ジョン「わかったよ、わかった」

と、ジョン、舐めるように、名残惜し  
そうにチビチビと。

鉄男「キャリアーは？」

ステフ「寝ちゃったわ」

ジョン「テツツオ、君は火星移住者の審査を  
受けたのかい？」

テツツオ「いいえ、なんですか、それ」

ジョン「そうか、この中で受けたのは私だけ  
か。」

火星へ移住するには短くて半年、長いと8  
か月余りの宇宙船内での生活をしないと  
いけない。

さらに火星でも狭い生活環境が待ってい  
る。

その狭い空間で、顔を突き合わせて平和に  
生活してゆくには、それなりの才能がいる。  
最悪、殺し合いだってありうる。  
その危険を避けるためのテストだ」

ステフ「そのテストのことは聞いたことがある。

コンピューターテストと、実地テストがあるのよね」

ジョン「そう。

火星行きたさに、自分の心を偽って回答しても、300問のテストで、それなりの傾向があればかれる。

コンピューターのテストでは設問に対して、（はい・いいえ・わからない）の選択を60秒以内にしないといけない。

たとえば、（白人は一番優秀である）という質問に答えるんだ。

まして3週間の共同生活テストでは、いろいろなストレスが押し付けられて、否応なくその人の性格が現れる」

鉄男「何が知りたいのですか？」

ジョン「その人が人類という概念をしっかりと持っているかどうか判断基準となる。

人間は、人種・種族・宗教・思想・政治・

経済的立場で戦争に明け暮れてきた。  
火星の小さなコロニーでそれをやられたら  
人類の未来はない。  
それを避けるため、そのような危険な傾向  
のある人は、はじかれる」  
ステフ「完全にクリーンな人たちを選ぶこと  
は不可能だわ」  
ジョン「そうだ。  
実際、この移住計画に資金を提供した大富  
豪の子供たちは、テストの結果は度外視し  
て、移住者に加われる。  
一つの不安材料だね」  
ステフ「世界中の宗教家がこぞってこのテス  
トに反対したのを覚えてる。  
特にアメリカの福音派キリスト教とイスラ  
ム教の反対がすごかったわね」  
ジョン「そうなんだ。  
だけどここの火星移住計画の金は、政府では  
なく、火星協会という民間組織から全額出  
ているから、アメリカ大統領でさえ文句を



言えない。

この移住計画には何千兆ドルもの金が使われている。

NASAやJAXA、欧州宇宙機関はただ技術協力しているだけだ」

鉄男「なぜ何千兆ドルものお金が集まったのですか？」

ジョン「海洋学者や気象学者、人口・食料学者、地勢戦略研究者などから、時を同じくして、人類はあと300年しか持たないという研究がいくつも発表され、それに呼応して世界の賢人たちが地球脱出のため、火星協会に力を入れたからだ」

ステフ「二人の子供のある夫婦が優先されるのよね」

ジョン「しかも、子供は4歳以上12歳以下で男女1人ずつという条件」

鉄男「なぜですか？」

ジョン「男子ばかり、女子ばかりだと火星の人口設計が危険になるから」

ステフ「なんかLGBTの人たちの人権が問われそうね」

ジョン「そうなんだけど、仕方ないんだ。

人類が生き延びられるかどうかの瀬戸際だから、我慢してもらわなければ」

鉄男「地球からの打ち上げロケットの加重はすごいでしょう？

子供は耐えられますか？」

ジョン「妊娠中と、生後3年までは乗れない。

最近の打ち上げロケットは加重3Gまでに改良されているから、それより大きい子供はOKだ」

鉄男「そうすると、マーズ7号の56人の中には子供もいるんですね？」

ジョン「うん」

鉄男「その子供たちも心理テストを受けるんですか？」

ジョン「いや、親だけだ。

だから両親共に合格しないと火星へはいけない」

ステフ「それとあらゆる人種の夫婦が選ばれてるのよね」

ジョン「うん。」

遺伝子の多様性は人類が生き延びるための武器になるから」

鉄男「やっぱり科学者や技術者が優先されるのでしょうね」

ジョン「そうだね。」

何もないところからの出発だから、生きてゆくための知識を持っていることが大事だ。

2033年の最初に人を乗せたマーズ5号には、農業技術者がたくさんいた。

火星で農作物を作るためだ。

それまでに35機の単体ロケットが火星に送り込まれ、10の居住ドームと、その中に農地と居住施設が作られた。

すべて100体近くのAIロボットのおかげだ」

○着陸船操縦室（夕方）

4人が座席に座っている

ステフ「3回目のテレポートは終わったけど」

ジョン「どうだ、平気かい？」

鉄男「ええ、慣れてきました。

もう大丈夫です」

ステフ「よかった。

あ、もうそろそろね。

ヒューストンからの定時通信」

その時、モニターが光る。

「スペースビテオフオン会社」の文字。

コンピューターの合成音声が。

コンピューター「ジョン・ダーウエルさんに、

エディ・ダーウエル（43）さんから、コ

レクトコールです。

1分間100ドルの料金ですが、お受けに

なりますか？」

ステフ「誰なの？」

ジョン「息子だ。

受けます、つないでください」

5秒少々で、画面に中年の男性が。

ジョン「やあ、エディ、元気か？」

エディ（55）「やあ、父さん」

ジョン「なんだ、急に」

エディ「300万ドル融通してくれ」

ジョン「藪から棒に何だ」

エディ「会社が倒産しそうなんだ。

弁護士が来てるから、手元の手書き入力で

サインしてくれ」

ジョン「ちょっと待てよ。

突然の連絡で（父さん元気か）ぐらい言え

ないのか」

エディ「あんたはそんない父親じゃなかつ

たから、これで十分だ。

頼んだぞ」

画面からエディが消える。

と、ダーウエル家の弁護士アーノル

ド・モリソン（61）が画面に。

ジョン「モリソン！」

モリソン「そういうわけで、エディに頼まれ

たから、気は進まないが引き受けた。

どうする？」

ジョン「しかたない。

倒産というのは本当か？」

モリソン「エディの会計士から財務を見せら

れた。

本当だ」

ジョン「しかたないな」

といってタブレットの署名蘭にサイン。

ジョン「頼んだぞ」

モリソンは手を挙げて席を立つ。

その時一人の美しいアフリカ系老婦人

が席に。

マギー（70 ジョンの元妻）「あなた、あり

がとう」

ジョン「あ、マギー！」

彼女は一礼して席を立つ。

ジョン「待ってくれ、マギー！」

モニターは暗転。

通話料金が表示される。

呆然とするジョン。

顔を見合わせるステフと鉄男。

ステフ「マギーって誰？」

ジョン「別れた私の妻だ」

と、再びスペースビデオオフィンの表示が。

コンピューター「こちら、スペースビデオ  
オン会社です」

ジョン「あ、マギーか？」

コンピューター「予約をなさったミランさん、  
いらっしやいますか？」

ステフ「はい、私です」

コンピューター「ミランさんとの通話が可能  
です。」

なお、通話料金は1分100ドルですが、  
ご了解いただけますか？」

ステフ「はい」

モニターに、父のジョージ・ミラン（6

8）と母ヘザー（66）が現れる。

背景はアメリカ家庭のありふれた居間。

ジョージ「あ、ステフ、母さん、ステフだ」

ヘザー「ステフ、ステフなの？」

ステフ「そうよ、わたしよ」

ヘザー「元気そうね、大丈夫？」

ステフ「元気よ、心配しないで」

ヘザー「あ、隣は・・・キャリーだね。」

すっかり大きくなって」

キャリー「おばあちゃん、こんにちは」

ヘザー「ああ、こんにちは。」

お前も元気かい？」

キャリー「うん」

ジョージ「お前はもう地球には帰ってこられ

ないんだな」

ステフ「そう・・・お父さん、お母さん、ご

めんなさい」

涙が溢れ出すステフ。

ヘザー「（涙を拭きながら）寂しくないかい」

ステフ「キャリーもいるし、テッツオもいる

し・・・」



ヘザー「テツツオって誰？」

ステフ「（鉄男の肘を引き寄せながら）私のボ  
ーイフレンド」

ジョージ「なんだって！」

鉄男、目を丸くする。

ヘザー「まあ！」

ジョージ「何者なんだ、その人は」

ステフ「宇宙飛行士よ。」

テツツオ、挨拶して」

鉄男、しどろもどろに

鉄男「・・お初にお目にかかります。鉄男で  
す」

ヘザー「なんで先に教えてくれなかったの」

ステフ「仕事でそれどころではなかったの」

ヘザー「テツツオ、あなたはステフを愛して

いるの？」

ジョージ「馬鹿なことを聞くんじやない」

鉄男「あの、私は・・」

ヘザー「キャリアー、ママの傍に立ってみて」

キャリアー、ステフの傍に。

ヘザー「3歳だったわね。」

3歳にしては背が高いと思うけど」

ステフ「宇宙では背が伸びるものなの」

そのとき、画面に激しいノイズが。

音も雑音が入る。

一瞬「太陽風の襲来」の警告が。

ヘザー「ああっ私のステフ！」

音が減衰してゆく。

ステフ「お母さん！」

突然モニターは暗転。

ステフ、泣き崩れる。

ジョン、キャリーの手を取って

ジョン「ホイールに戻ろうね」

戸惑うキャリーを連れてスポークで下

に降りるジョン。

鉄男、ステフの肩に手を添える。

ステフ、泣きながら鉄男にすがる。

しばらくして泣き止んだステフ、鉄男

から離れる。

ステフ「ごめんなさい。」

見苦しいところをお見せして」

鉄男「いえ、泣いて当り前です」

ステフ「あなた、ご両親は？」

鉄男「・・・亡くなりました」

ステフ「ほかにご家族は？」

鉄男「姉夫婦がいます」

ステフ「お姉さまには、今度のことは話してあるの？」

鉄男「ええ、泣かれてしまいました」

ステフ「そうよねえ」

鉄男「ジョンには家族は？」

ステフ「早くに離婚して、奥さんは子供を連れて出て行ったそうよ。

さっきの人たちね」

鉄男「じゃあ独り身」

ステフ「仕事にかまけて家族を失ったと悔やんでいたわ」

鉄男「それは気の毒に」

○着陸船操縦室（朝）

やはり、4人が席についている。

ジョン「昨日の太陽風は大きかったね」

ステフ「おかげでビデオフォンが途切れたけど」

鉄男「太陽風って、宇宙放射線でしょ。

私たちの体に影響は？」

ジョン「マーズ号の居住区の壁は何層もの

ポリエステルで覆われ、放射線を遮蔽している。

しかも、ホイール全体が磁気で防御されているから、太陽風も怖くない」

鉄男「そうですか。

それはそうと、コツが飲み込めてきました。

今日は、続けて38万Kmを2回跳びます」

ステフ「ちよつと無謀だわ、いくらなんでも」

鉄男「今の火星までの距離は？」

リンカーン「おおよそ5500万Kmです」

鉄男「どんどん火星が遠くなっています。

このままではとても7号に追いつけません。

無理を承知です」

ステフもジョンも言葉がない。

鉄男「前と同じ画像を」

リンカーン「はい」

鉄男「よし」

シーンと水を打ったような静けさ。

モニターに表示された移動距離から成功したことが分かる。

鉄男「もう一度」

移動距離の変化で成功と知れる。

鉄男が唸り、目を閉じる。

呼吸が荒くなる。

ステフとジョン、ベルトを外して鉄男を浮かせ、居住区へ。

キャリー、ステフの肩に掴まり泳いでゆく。

## ○ 医務室

ステフ、寝ている鉄男の腕に点滴を。

キャリー、鉄男の手を握りしめる。

ジョン「このまま続けられるのかなあ。

単純に5500万Kmを38万Kmで割ると、おおよそ140回テレポートしないと、いけない。

とても体がもたないよ」

ステフ「テツツオが休んでいる間は、プラスマビームエンジンが動いているから」

ジョン「エンジンは最高秒速30Kmだけど、最初は一日2Cm進み、少しずつ加速していくから、平均速度はもっと低いはず」

ステフ「7号はあと2か月ちょっとで火星を通り過ぎる」

ジョン「1日3回テレポートすれば、およそ48日で追いつくが。体が持つかなあ」

ステフ「一回ごとに十分休養させれば・・・」

ジョン「ヒューストンに相談してみては」

ステフ「そう、私たちだけで決めるにはあまりに重大だし・・・」

今からヒューストンに連絡するわ」

ステフ、席を立つ。

キャリー、鉄男の手を握りしめたまま、

キャリー「私、ここにいる」

ステフ「そうして。」

この点滴の袋が空になり始めたら、その

マイクでママを呼んでね」

キャリー「うん」

ステフ「ジョン、お願いね」

ステフ、鉄男の頬をなでる。

ジョン「わかった」

○ホイール操縦室

ステフ、通信機のスイッチを入れる。

モニターに arrival の表示。

マクニール「It looks like you succeeded

again. Good. Here you go.」

**字幕**（今回も成功したようだね。

よかった。どうぞ）

ステフ、モニターのマクニールに話しかける。

ステフ「He teleported twice this time.

It seems that the load was still too much

for Tetsuo.

I'm not sure if he can continue]

**字幕**（今回、2回連続でレポートしたんですが、やはりテツツオには負荷が大きすぎたようです。

このまま続けられるのか不安です」  
しばらく無音の時間。

マクニール「Send me the medical data of him.

Our medical team will review it. Over]

**字幕**（彼のメディカル・データを頼む。

こちらの医療チームが検討する。どうぞ）

ステフ「Yes, sir. Please.」

**字幕**（わかりました。お願いします）

ステフ、通信機のスイッチを切る。

○ ホイール操縦室

鉄男がステーキを頼張っている。

ステフ「すごい食べっぷりね」

鉄男「心配かけてすみませんでした」



ジョン「点滴が効いたようだね」

キャリー「そのフライドポテト、私にも少し

頂戴」

鉄男「ああ、はいどうぞ」

鉄男ティッシュでひと塊かたまり摘まんでキャリーに渡す。

キャリー「むしゃむしゃ食べる。」

ステフ「あなたも元気ね」

キャリー「うん。おいしいよ。」

ママもどう？」

ステフ「ああ、もうそろそろお昼ね。」

ちよつと早いけど、食事にしましょう。

あ、それからテツツオ、食後にこの錠剤を

呑んでね」

鉄男「なんですか、これ」

ステフ「あなたの倒れた原因は、脳の代謝異

常らしいとヒューズトンから連絡があっ

たの。

あなたの脳はすぎまじい速度で神経伝達が行われ、そのため、アミノ酸の利用が追

ついていないためらしいと。

それでこの薬を飲んだほうがいいと」

鉄男「1日1回ですか？」

ステフ「いいえ。

この（ブレイン1）という薬はもともと脳の障害者のため開発されたもので、たとえば会話が困難な障害者も、これによって、ある程度スムーズに話ができるようになってきたそうよ。

でも習慣性があるから、3日に一回だけ」

鉄男「麻薬みたいなものですか？」

ステフ「それほど危険ではないけど」

鉄男「ふーむ」

T 「23日目」

○ホイール・ルームA（夜）

ジョンと鉄男が壁面の野菜育成ボックスを見ている。

ジョン「この土を見てごらん」

鉄男「少し赤いですね」

ジョン「これは本当の火星の土だよ」

鉄男「その土で栽培って、難しいんじゃないですか」

ジョン「もともと栄養分がないし、微生物がない。」

火星はレゴリスという大きい砂粒みたいな土で覆われているが、水や空気を通しにくい。

そこで一旦ドームで土を水に浸し、そこへピートモスという植物を入れて塩化物や硫化物を除くとともに、植物の根が張りやすく、水も吸えるように改良する。

それに加えて地球から地中の微生物を持って来て、それをばらまいた。

それなりの苦労はあるけど、それらを修正したら、ほら育ってるだろ。

火星のドームではもう土づくりが完成しているんだ」

鉄男「へえ」

ジョンがビンから黒い粉をスプーンで

掬すくって、土に混ぜる。

鉄男「それは？」

ジョン「これは人の糞尿を脱塩し高温で乾燥させ、脱臭させた肥料だ。

火星での肥料工場は遠い先の話だから、それまでは人間の排せつ物などに頼ることになる。

尿のアンモニアは窒素肥料になる」

鉄男「ウェッ」

ジョン「昔から人糞は大事な肥料だったんだよ」

野菜から、横の銀色のものに目を移す

鉄男。

鉄男「これはなんですか」

ジョン「知らないのかい。これ、有名なロボットだよ。

船外活動は、危険な宇宙放射線が飛び交っているから、人間はもうやらないんだ。

代わりに、このアイオンがやってくれる」

鉄男「へえ。これ動かせるんですか」

ジョン「やってみよう。」

アイオン、こちらに来なさい」

二足歩行ロボットのアイオン、壁の充電装置から離れてこちらへ、スムーズにやってくる。

そこへキャリィが駆けてくる。

キャリィ「ダディ、私頭洗ったよ。」

ほら、きれいでしょ」

鉄男「うん、ほんとだ」

キャリィ「ダンスしようか？」

鉄男「うん、やろう。」

ジョン、このアイオンは踊れますか」

ジョン「さあ、やらせたことがないから、何

とも言えんな。

でも、面白いからやってみよう。

リンカーン、ビーチボーイズの（グ

ッド・バイブレーション）を再生して。

アイオンも真似をして踊れ」

リンカーン「承知しました」

鉄男「古い曲ですね」

ジョン「そうさ、私と同じくらいにね」

すぐに音楽が鳴りだし、3人はそれぞれ踊りだす。

*I love the colorful clothes she wears*

*And the way the sunlight plays upon her*

*hear*

*I hear the sound of a gentle word*

*On the wind that lifts her perfume*

*through the air*

*Im picking up good Vibration*

*She s giving me the Excitation . . .*

3人は、勝手気ままに体をゆすり、

アイオンもそれなりに体を動かす。

そこへ入ってきたステフ。

ステフ「私抜きで踊るなんて、ずるい」

と、言いながら腰を振り、手を振る。

と、その時、プシュツという音がして、

部屋に大風が吹き始める。

そして、キャリーの体が宙に浮き、

ステフが抱き寄せる。

ステフ「なに、これ？」

ジョン「床に穴が開いた！」

ステフ「え？」

ジョン「テツツオ、二人を隣のルームA

へ！」

鉄男、ステフとキャリーを抱いてテレポルト。

○隣のルームA（夜）

急に現れた三人、

鉄男「ここにいて」

鉄男一人、元の部屋へテレポルト。

○ホイール操縦室（夜）

鉄男、出現。

ジョン、風に逆らいながら、壁の棚か

ら（repair kit）と書かれたケー

スを引き抜く。

その中から20センチ四方の金属板

を取り出す。

ジョン「テツツオ、あの床に開いた小さい穴が見えるかい？」

鉄男「ああっ、はい」

ジョン「あの穴に、この板の赤い面を張り付けてくれ」

鉄男、板を受け取ると瞬時にその穴の正面に跳び、穴に吸い込まれそうになりながらも、張り付ける。

とたんに風が収まる。

ジョン「隕石がぶつかった。

小さいやつでよかった。

ほら、あれだ」

ジョン、10mmぐらいの石つぶてがめり込んだ天井を指さす。

ジョン「水の導管は無事らしいな。

リンカーン、至急空気を補充！」

リンカーン「はい」

ジョン「アイオン、船外で外の壁を補修！

リンカーン、ホイールの回転と磁気シール



ドを止める」

アイオン、ピーと音を発し、エアロツクへと向かう。

○ホイール操縦室（夜）

モニターに、ホイールに張り付いているアイオンが映っている

補修板を人差し指のバーナーで溶接するアイオン。

ジョン「終わったか？」

アイオン「ビー」

ジョン「よし、帰ってきなさい」

アイオン「ピー」

アイオン、ホイール全体をカバーしている非回転手すりにはめていたロープのついたテザーを解いて腰のロープボックスに収納。

手すりを伝ってホイールのエアロツクへ。

○ホイール操縦室（夜）

戻ってきたアイオン。

スビーカーからステフの声。

ステフ「もう入ってもいい？」

ジョン「ああ、もういいよ。」

リンカーン、ホイールを回転させ、磁気シールドを稼働させて

隔壁が開き、ステフとキャリーが入ってくる。

と同時にホイールが回転し始めてよろける。

キャリー「ダディ、怖かったね」

鉄男「ほんとだね」

ステフの顔も青ざめている。

ジョン「アイオン、床の補修板を溶接」

アイオン「ピー」

やはり人差し指の炎で溶接。

ジョン「リンカーン、パラボラは大丈夫か？」

リンカーン「プラズマビーム推進装置は正常です」

鉄男「なんだか難しそうですね」

ジョン「私もよく分かん」

T「25日目」

○回転ホイール回廊（朝）

ジョンと鉄男、ステフとキャリーの先  
10mを歩いている。

ジョン「テツツオ、君は鈍いのかい？」

鉄男「え？」

ジョン「だからさ、ステフのことさ」

鉄男「彼女がどうかしましたか？」

ジョン「ああ、いらいらする。

彼女の君への想いさ。

わからないのか」

鉄男「想いつて」

ジョン「だからさ、何でもないのに君の腕に  
手を掛けたり、頬を触ったり」

鉄男「ああ、あれは多分体温を測ってるんで  
しょ」

ジョン「いやはや、あきれ果てた男だね。

あれは、君に恋しているサインなんだよ」  
鉄男「・・・そんなはずないです。

彼女は医学博士、私は高校出の旋盤工。  
金もなければ財産もない。頭も悪い。  
ありえないです」

ジョン「この宇宙では、金も財産もなんの意  
味もない。

欲しいものが買えるでなし、高い地位に着  
けるでなし。

ここで値打ちのあるものは、唯一人間性な  
んだよ」

鉄男「でも、私なんか・・・」

ジョン「ああ、いまいましたい。

君と話している間、彼女が自分の髪に何度  
も手を当てているのを知っているのか？  
もういい、腹が立ってきた」

ジョン、速度を上げて歩き去る。  
後ろを見ると、ステフが彼と目が合っ  
て、自分の髪をかき上げるのを見る。

鉄男、キッと前を振り向き独り言。

鉄男「おいおい、冗談だろ？」

ほんとだったらどうする」

急に噴き出した汗をぬぐう鉄男。

○ホイール操縦室

ジョンは壁面のモニターで、録画された地球のニュースを見ている。

キャリーは野原の花と蝶の写真を見ながらスケッチブックに蝶を描いている。

それを見ている鉄男。

突然、キャリーがスケッチブックに書きなぐる。

鉄男「どうしたの？」

キャリー「いくら描いたってちようちは飛ばないもん」

鉄男「そうか・・・、よしよし。

ジョン、そのノートの紙1枚いただけませんか？」

ジョン「ああ、いいよ」

と、ルーズリーフから1枚外して鉄男に渡す。

鉄男、その紙に羽根を開いた蝶を描き、子供用のはさみで切り抜く。

さらに2センチ幅の紙を筒状に丸めて蝶の真ん中にテープで接着。

そして羽根に角度をつける。

鉄男「さあ、できた」

キャリー「そんなの飛ばないよ」

鉄男「見てください」

と、その蝶を手のひらに、3mの天井へテレポートし、そこから蝶を放す。

蝶はヒラヒラと低重力の空間を舞いながらゆっくり降りてくる。

ジョンは手元のノートでそれを扇ぐ。

ふたたび蝶は上へ。

キャリー「うわーい！」

追いかけて手で蝶をつかまえる。

鉄男「それじゃ、もっとちょうちよを作りましょう」

と、5羽の蝶を描き、キャリーにはさ  
みで切り抜かせる。

鉄男「キャリー、ちょうちょに色を塗って」  
キャリー、蝶に赤や青など様々な色  
塗る。

鉄男、出来た蝶を全部手に再び天井へ。

鉄男「さあ、ちょうちょのダンスだ！」

色とりどりの蝶が舞い始める。

キャリー「すごい！　すごい！」

そのときステフが入って来て、宙を舞  
う紙の蝶に目を見張る。

ステフ「うわあ！　なにこれ！」

ジョン「キャリーとテッツオが作ったんだよ」

ステフ「そう！」

あなた幼稚園の先生になれるわよ」

と、鉄男の頬にキス。

ドキッと心臓が止まりそうになる鉄男。

T 「35 日目」

○ ホイール操縦室（夜）

4人がテーブルの前に、カードで神経衰弱をやっている。

ステフ「さあ、私の番ね。

じゃ、これ」

カードを1枚裏返す。

スペードの5。

ステフ「もう1枚は」

めくるとクラブのジャック。

ステフ「キャリー、カードを覚えた？」

キャリー「うん」

カードを閉じるステフ。

鉄男「今度はダディだ」

と、1枚めくると、ダイヤの5。

鉄男「しめしめ、これでカードはダディのも

のだ」

と、さっきのスペードの5のすぐそばの、違うカードをわざと間違っ引く。

鉄男「ああ、残念！」

キャリーが嬉しそうにケタケタ笑う。

ジョン「よしよし、これでいたただきだ」



と、スピードの5とダイヤの5を開き、  
自分の手札に入れる。

キャリー「ああ、ダメ！ それは私のカード」  
と怒り出す。

ジョン「何を言ってるんだ。

わからんやつだなあ」

鉄男「ねえ、グランパ、相手は子供じゃない」  
ジョン「なんで私が君のじいさんなんだ！

それに、世の中は厳しいんだ。

子供のころからハードなルールを知ってお  
いたほうがいいんだ」

鉄男「この宇宙のど真ん中でそれを持ち出す  
んですか。

明日をも知れぬ私たちなのに。

ジョン、このところ、ちょっといらいら  
してませんか？

大丈夫ですか？

なにかあるんなら、私やステフに相談して  
ください」

ジョン「何もないよ！

何もないから、いらつくんだ。

マギーの奴め、話そうともしないで」

ステフ、あっけにとられるキャリーの  
手を引いて、

ステフ「もう遅いから、寝るわね」

鉄男「お休み」

ジョン「・・・お休み」

あとには気まずく取り残されたジョン  
と鉄男。

鉄男「あなたに打ち明けたいことがあります」

ジロツと睨みつけるジョン。

鉄男「私は、実の父を殺しました」

ジョン「え」

鉄男「ずいぶん前のことです。

父が母を殴り殺したとき頭に血がのぼって、  
父を捕まえて、空の高みから投げ落として  
殺しました。

このことは誰にも話したことはありません。

N A S A も J A X A も知りません」

ジョン「ほんとうか？」

鉄男「ええ」

ジョン「なんでまた私に話すのだ？」

鉄男「マーズ8号に乗ってからあなたと接して、こんな人が私の父だったらよかったのにと・・・。

他人なのに恋の手ほどきまでしてくれて。さっき言ったことは度が過ぎました。

許してください」

鉄男、ジョンを軽くハグして、自分の寝室へ。

とまどうジョン。

○ステフの寝室（夜）

寝室のドアを少し開けて、寝ているキヤリーのそばでこれを聞いていたステフ。

○その夜の鉄男の寝室

ドアが音もなく開いて、ステフがベッ

ドにもぐりこんでくる。

鉄男、驚いてベッドの奥へ。

しずかに扉を閉めるステフ。

ステフ「さっきの話聞いたわ」

鉄男「何の話？」

ステフ「あなたのお父さんのこと」

鉄男「ああ」

ステフ、鉄男の体に腕を伸ばし抱きしめる。

ステフ「苦しかったですよ」

鉄男、ためらいながら、唇を彼女のそれに重ねる。

小一時間後、彼女の前髪をやさしく

撫でる鉄男。

鉄男「前から聞こうと思ってたんですが、

キャリアーの実のお父さんのこと」

ステフ「ああ、あの人」

鉄男「それ以後連絡はあるんですか？」

ステフ「いいいえ、無いわ。」

だって奥さんいるもの」

鉄男「スマートフォンにもかかってこない？」

ステフ「宇宙ではスマートフォンは使えないの」

鉄男「へえ、そうなんですか。

NASAは知ってるんですか、あなたたちのこと」

ステフ「もちろん知ってるわ」

鉄男「後悔はしていませんか？」

ステフ「・・・。」  
ついこの間までは、彼が恋しくてならなかった。

恋愛中はそんなこと考えもしなかったけど、キャリアの顔を見るたびに、すまない気持ちになるわ。

普通に地上で恋していれば、あの子にこんな過酷な人生を歩ませずに済んだのに」

鉄男「今の私たちのことは？」

ステフ「前のこともあるし、今度は気を付け

ようと思つてたの。

でも、キャリーと遊んでくれているのを見て、この人優しい人なんだなと……。

この人となら……」

鉄男「ステファニーさん……」

黙つて二人は抱き合う。

ホールの回廊（朝）

散歩する4人

ジョンが寄つて来る。

いたずらっぽい表情で、

ジョン「今晚は特別に一杯やるか？」

鉄男「ああ、はい、喜んで」

ステフ、ニコニコして黙つて聞いている。

T 「41日目」

○ 着陸船操縦室

操縦席で、鉄男が大きな深呼吸。

ステフ「今日で118回のレポーション」

ン。

それも一日3回。

ほんとに体が慣れてきたのね。

前みたいに倒れることもなくなっただし」

鉄男「ええ、それもステフ、あなたのケアのおかげです」

ステフ「そうよ」

ジョン「ヒヤア、お二人さんホットだなあ」

鉄男「そんなんじゃないです」

ステフ「（鉄男の目を見つめて）そんなのよ。そうでしょ、テツツオ」

鉄男、顔を真っ赤にして口ごもる。

ジョン「こいつ小娘みたいだな」

ステフ「さて、ヒューストンとの定時連絡」

ステフ、カメラに向かって話し始める。

ステフ「ヒューストン、ヒューストン。

こちらマーズ8号。

今日はお聞きしたいことがあります。

以前の通信でマーズ7号とは連絡しないように言われていました。

連絡を取り合おうと、うまく助けられなかったときのショックが大きすぎるからと。でも。もう直接連絡してもいいと思います。が、いかがですか。

ご返事をお待ちします、どうぞ」

スイッチを切るステフ。

ジョン「7号の人たちはどんなだろうなあ。

ちよつと想像がつかない」

ステフ「もう助からないって思ったたら、どうするでしょう」

ジョン「自殺する人も出てくるんじゃないか。

木星を過ぎ、土星を過ぎ、そして海王星を過ぎたりしたら」

鉄男「それよりまず食料と水と酸素が・・・」

ステフ「そうよ。そうだわ。

私なら安楽死を・・・」

と、言いながら、横のキャリアを見てハッとする。

ステフ「ダメ、ダメ。何としてでも生き残らないと」



○ ホイール操縦室

昼食を摂っている4人。

鉄男とジョンは、ビーフカレーライス  
とオニオンスープ。

ステフとキャリーは野菜と肉入りの  
ミネストローネスープとナン。

キャリー「ママ、このスープ熱いよ」

ステフ「ほんと？」

と、スプーンに掬って飲んでみる。

ステフ「ほんと、熱いわね。」

ママが冷ましてあげる

と口で息を吹きかけ冷まそうとする。

それを見ている鉄男。

「回想」

○ 6 畳一間のアパート（夜）

母由美子（29）が、2つの茶碗に少  
ないご飯を盛って、ちゃぶ台に運んで

くる。

机の上の醤油さしを取り、2つのご飯に少しずつ垂らす。

由美子「紗枝ちゃん、鉄ちゃん。

今日はおかすが無いけど我慢してね。

明日には内職のお金が入るから。

さあ、おあがり」

紗枝（9）「お母さんのは？」

鉄男（6）「そうだよ、お母さんの分は？」

由美子「先に食べちゃったからいいのよ」

と、立ち上がり、二人に背を向けて、

流しの前で湯飲みに一杯水を汲み、ゆ

っくり飲んでゆく。

事情を知っている紗枝は、辛そうな顔

をして、ご飯を口に運ぶ。

鉄男も黙って食べる。

（回想終わり）

ステフ「テッツオ、どうしたの？」

おかしな顔して」

鉄男「え、ああ、二人を見ていて、昔のことを思い出したんだ。

昔のことを・・・」

T「39 日目」

○着陸船操縦室（朝）

鉄男、操縦桿を握りしめ、モニターの火星軌道を見つめる。

軌道のその先に、赤い芥子粒ほどの星が光る。

ジョン「とうとう火星が見えてきた」

ステフ「それより困ったことがあるの」

ジョン「ヒューストンのことだろ？」

ステフ「そう、この7日間、連絡がないの。どんなに長くても2時間以内に連絡が取れ

るはずなのに」

鉄男「それって」

ジョン「大変なことだ。

そのためここ1週間軌道修正が出来ていな

い」

ステフ「それより前から、通信の質が落ちていたので、心配していたの」

ジョン「リンカーン、通信アンテナは正常

か？」

リンカーン「正常です」

ジョン「じゃ、なんで通信が出来ないんだ」

リンカーン「まったく通信が来ていないのではありません」

ジョン「言ってることの意味が分からない」

リンカーン「通信は入っていますが、電波のレベルが低かったため、ノイズと判断しま

した。

再生しますか？」

ジョン「それなら早く言ってくればいいのに」

リンカーン「指示がありませんでしたから」

ジョン「ああ、そういうことか。」

わかった。直近の連絡を再生してくれ」

モニターに縞模様が次々と。

さらに雑音が。

ジョン「これは一体？

やっぱりノイズか」

しばらく画像を見つめる4人。

キャリー「なんか言ってるよ」

ステフ「え？ キャリー、分かるの？」

キャリー「人の声だよ」

考え込む3人。

鉄男「そうだ、画像を早送りできますか」

ジョン「早送り？」

ステフ「もしかしたら・・・」

ステフ、画像調整ダイヤルを回す。

ダイヤルが早送りになるにつれ、画像

と音が正常に。

マクニール「こちらヒューストン。こちらヒ

ューストン、聞こえますか？」

ステフ「あっ、」

リンカーン「続いて次の通信です」

マクニール「今日も聞こえてないのかな。

でも送信しよう。

こちらヒューストン、聞いてくれ。  
そちらは大変なことになっている。  
君たちの8号が7号の真後ろにいる。  
こんなに早く追いつくはずがないのに。  
考えもしなかったことが起こってしまった。  
た。  
専門家が言うことには、原因はテレポ  
ーションらしいということだ。  
光は1秒間に30万Km進むが、君たちの  
船は、一瞬で38万Km進んだ。  
それも何回も。  
ということとは、光よりも早い。  
光よりも早く進むとき、どんなことが起き  
るかは、学者の間でもよく分かっていない。  
でも今度のことでは、8号の船内よりも外  
の世界は、時間がゆっくり進むらしいこと  
が推測される。  
そのため、まともな通信はできないのでは  
ないかと思われる。  
7号は君たちより80万Km先にいる。

今からはマーズ7号との通信を許可する。  
宇宙空間座標は、火星の東キャナル基地か  
らもらってくれ。

東キャナルと通信できるか分からないけ  
ど、

ヒューストンとのやり取りでは急ぐ間に  
合わないから。

以上、健闘を祈る。

こちらヒューストン、通信終わり」

船内に静寂が流れる。

混乱して考えがまとまらない一同。

突然モニターが光る。

ステイブ・ランカスター（45）「マーズ8  
号、マーズ8号。

こちらマーズ7号、マーズ7号。

コマンダー  
船長のランカスターです。どうぞ」

音声にエコーが懸かり画面が脈打つ。

ジョン「あっ、来た！」

ステフ「マーズ7号、こちらマーズ8号

のミランです。

ついさっきヒュー斯顿からの連絡をもらいました。

追いついて良かったです」

ランカスター「ほんとによかった。

あなたたちの努力に感謝します」

ステフ「そちらの状況はいかがですか。

どうぞ」

ランカスター「・・・。

残念ながら、3組の夫婦が早まって自殺してしまいました。

連絡を手短にします。

こちらはあなた方のすぐ前にいます。

ただ、このままでは8号とランデブーする

ことはできません。

進む方向と速度がずれているからです。

こちらの信号を頼りに迎えに来てもらえ

ませんか」

ステフ「わかりました。

もうしばらく我慢して信号を発信し続



けてください。

そちらの速度はどのくらいですか？」

ランカスター「1秒に22Kmです」

ジョン「こちらは1秒20Km。

そちらは加速を一時止めてください。

速度を揃えないと」

ステフ「ランカスターさん、しばらく待っていてください」

と、そのときランカスターの傍にいた

男が画面に割り込んでくる。

ジェシー・ダグラス（35 ステフの元恋人）

「ステフ！ ステフじゃないか！」

ステフ「あっ、ジェシー！」

ジェシー「どうしてた。

探し回ったよ」

ステフ「あなたこそどうしてそこに！」

ランカスター「君たちは知り合いか？」

ジェシー「はい」

ランカスター「そうか。

積もる話はあるだろうが、今は船を近づけ

ることが優先だ。

夜になったら話を続けてくれ」

ステフ「ええ・・・ええ」

通信スイッチを切るステフ。

ジョン「誰なんだ？」

ステフ、茫然とモニターを見据える。

ステフ「キャリーの・・・」

ステフ、横に座ったキャリーを見る。

鉄男「えっ？」

ジョン「キャリーの、なんだ？」

ステフ、気を取り直して

ステフ「リンカーン、7号の位置をとらえ

られる？」

リンカーン「正確な新しい位置は、さっきテ

レポートし終わったところなので、分かり

ません」

ステフ「そう」

続いてステフ、「火星基地」と書かれた

ボタンを押す。

ステフ「東チャンネル、東チャンネル。」

こちらマーズ8号、マーズ8号。

応答をお願いします」

60秒ほど経って絵と音が入る。

やはり音にエコーがかかり、画面が脈打つ。

リチャード・メイヤーズ(35)「こちら東キ

ヤナル火星基地、マーズ8号聞こえます

か？」

ステフ「こちらマーズ8号のミランです」

メイヤーズ「ああ、よかった。

火星基地司令官メイヤーズです」

ステフ「急なお願いで恐縮ですが、私たちの

8号と、もう1機の移住船7号の空間座標

が至急必要なのですが、お願いできます

か？」

メイヤーズ「わかりました。

できるだけ早くお知らせします」

ステフ「いったん通信を終わります」

ステフ、スイッチを切る。

ジョン「テツツオ、テレポーターションを2

回やってくれないか。

すると7号との距離が短縮できる」

鉄男「そうですね、やりましょう」

○ホイール・操縦室（夜）

ステフ「ジョン、キャリーを見ててね。

ジェシーと話をしてくるから」

ジョン「わかった」

ステフ「テツツオ、いっしょに来て」

鉄男「でも・・」

ステフ「あなたにも聞いていて欲しいの。

大事なことから」

鉄男「・・・うん」

二人はスポークの中へ。

○着陸船操縦室（夜）

席について、7号との通信回線を開く

ステフ。

待っていたかのように、画面にジェシ

ーが映る。

ジェシー「やあ」

ステフ「ええ」

ジェシー「え？ その人は？」

ステフ「この人は、マーズ8号をたいへんな

スピードで7号まで近づけた人、テッツオ」

ジェシー「なんのことだかわからない」

ステフ「わからなくてもいいの。」

7号との距離が短縮したのは確認できた？」

ジェシー「うん」

ステフ「それより、なぜあなたはそこに」

ジェシー「うん。」

3年前、辛い思いで君と別れた後、地球で家に帰ってみると、妻はほかの男と暮らしていた。

結局、子供もいなかったから、話し合いの末に離婚した。

彼女は知らなかったが私も不倫していたから、とやかく言う立場になかった。

しばらく旅客機のパイロットをやっ

たが、マーズ7号のランカスター船長に誘われて、7号に乗り組んだ。

君と別れた虚しさは例えようもない。

それでなんとか君に会いたいと手を尽くしたが、どこへ行ったのかわからなかった。

ここで会えたのは奇跡だ」

ステフ「ずいぶん都合のいい話ね。」

ISSには何の連絡も寄こさなかったのに」  
ジェシー「連絡取ろうとしたが、NASAは

許さなかった。

連絡の取りようがなかったとはいえ、すまなかった。

許してくれ。

あれから君はどうしてたんだ？」

ステフ「知らなかったでしょうが、あれから9か月後に、あなたの子供を産んだわ」

ジェシー「なんだって！」

それは・・・それはうれしい」

ステフ「うれしいですって！」

私は3年以上もマーズ号で子供を育ててい

たのよ」

ジェシー「・・・ほんとにすまない

欲望を抑えられなかった私が悪い」

ステフ「・・・いえ、それは私も同じこと。

あなただけが悪いんじゃないけど」

ジェシー「子供は、男の子？ 女の子？」

元気なのか？

会わせてくれるか？」

ステフ「今すぐはダメ。

このテットオに頼んで、

父親はテットオだと教えているから。

もし、本当の父親があなただと言え、あ

の子は混乱する。

それに・・・」

ジェシー「それに・・・なんだ？」

ステフ「・・・それに、今私はテットオと

付き合っているから」

ジェシー「あああ、・・・そうか。

そうなのか」

苦い表情で下を向くジェシー。

ジェシー「テツツオ、君がいてくれてよかった。

宇宙での寂しさは、私もよく知っている。

ステフのそばにいてくれてありがとう」

鉄男「いいえ・・・、それは・・・」

ジェシー「君はステフを愛しているのか？」

鉄男「日本人は（愛する）という言葉はめったに使いません。

使うのは（好き）という言葉です。

私はステファニーさんが好きです」

ステフ「テツツオ！」

ジェシー「そうか、好きか。

もう私の入るスキはないか」

鉄男「いや、そう簡単に決めつけないでください。

お二人の話の話を聞いていると、そんな単純な話ではないようです。

それに、キャリーの気持ちもあるし」

ジェシー「キャリーって」

鉄男「あなたの娘さんです」



ジェシー「ああ、そうか、キャリアーか。  
いい名前だ」

鉄男「娘さんには会わせませんが、彼女の心がなるべく傷付かないようにみんなで考えましょう」

ジェシー「そうだ、その通りだな」

ステフ「疲れ果てたわ。」

今日はこのへんで」

ジェシー「ああ」

通信スイッチを切るステフ。

ステフ「ありがとう、テツツオ」

鉄男「いやなに。」

これから3人でよく考えよう」

T 「50日目」

○2 隻の宇宙船が並行して進んでいる宇宙

○8 号ホイール操縦室

モニターにランカスターの姿。

ランカスター「とうとう追いつきましたね、

ほんとにありがとう。

みんな喜んでいます」

ステフ「ほんとによかった。

こちらの船への移動は？」

ランカスター「地球軌道上でやったように、

あの蛇腹式のシューターを使いましょう」

ジョン「あの、大量の物資を積み込んだ通路。

エアロックの部屋にある」

ステフ「連結は船外からやらないといけない」

ジョン「ロボットでやりましょう」

ランカスター「両方のシューターを連結しま

しょう」

ステフ「シューターは気密性は？」

ランカスター「もちろん大丈夫」

ステフ「じゃあ、早速やりましょう」

○ 2 隻の宇宙船の並ぶ宇宙。

2 隻のホイールの回転が止まる。

太陽光パネルが畳まれる。

2 隻の距離が縮まってゆく。

8号の姿勢制御ノズルからガスが。  
2隻のホイールが、エアロックを向かい合わせに止まる。

宇宙に出た2体のロボットがそれぞれのエアロックの隔壁を開く。

2体のロボットが、シューターの取手を掴み、ジェットをふかして、シューターどうしの円形の接合金具を止めた。

長さにして5m。

リンカーン「接続完了しました」

そのとき、明かりがすべて消える。

○マーズ8号エアロック前

ジョン「なんだ？」

何が起こった？

鉄男「いったい！」

ジョン「リンカーン、どうなってる！」

リンカーンは答えず、なんの動きもない。

鉄男「7号まで行って、状況を確認してきます」

鉄男、手探りで壁のフラッシュライトを取りはずし点灯。  
それをジョンに渡す。

鉄男、そばにあった船内用宇宙服を  
まとい、ヘッドライトを点灯。

鉄男「ジョン、彼女たちを、ルームAへ避難させて、そのあと、ここで待機してください。  
い。

船内宇宙服を着てくださいね」

ジョン「よし！」

ステフ「テットオ！」

ジョン、二人を押しして隣の部屋へ。

鉄男、3人が隣へ移り、隔壁が閉じられたのを確認。

○ホイールのエアロック

鉄男、床下のシューターの隔壁のレバーを倒して開く。

○シューターの中

エアロック前の空気の流れに押されて

鉄男、シューターの奥へ。

5 m進むと、7号の隔壁の前に。

腕の計器を見る。

鉄男「温度マイナス30度、酸素濃度17%」

鉄男、隔壁レバーを倒し7号の船内へ。

○マーズ7号エアロック

そこにやはり船内宇宙服を着た人間が

二人、暗闇の中、ライトを灯して浮か

んでいた。

鉄男「マーズ8号の鉄男と申します」

ランカスター「船長のランカスターです。

こちらはパイロットのダグラスです」

鉄男「ダグラスさん、先日はどうも」

ジェシー「ええ、どうぞよろしく」

ランカスター「停電してます。

いったい、何がどうなっているのか・・・」

鉄男「ごめんなさい、停電の話はあとで。

今シューターの中が調整されました。

こちらの隔壁を開いたので、シューターの

中の酸素濃度は呼吸可能になりました。

いつ8号へ移動しても大丈夫です。

通路はたいへん寒いですが」

ランカスター「8号の中も停電しているので

すか？」

鉄男「そうです。

でも、いずれにしろ、移動しなくてはなり

ません。

早速始めていただけますか？」

ランカスター「そうですね。

やりましょう」

ランカスター、資材庫Eの隔壁開閉

ボタンを押すが開かない。

鉄男「停電していますから、手動レバーで」

ランカスター「お、そうだ、そのとおり」

といいながらレバーを倒す。

そこにはたくさんの人たちが空中

で待っていた。

ランカスター「今からマーズ8号への移動を始める。

慌てずに、ゆっくり移動してください。

シューターへは頭から入ってください。

私が人員確認しますから、ストップと言ったら、ちよっと待ってください。

じゃあ、どうぞ」

ランカスター、手にタブレットを持ち、移動した人の名にチェックを入れてゆく。

ジェシーが避難誘導を。

子供を抱いた親、子供と手をつなぐ親、夫婦が手を取り合って8号へ。

それを見ていた鉄男の胸が熱くなり、涙がにじむ。

## ○マーズ7号エアロック前

宇宙服のヘルメットを脱いだ鉄男とランカスターとジェシー。

ランカスター「やりましたね、ありがとう。

我々で最後です」

とそのとき電灯が明るく灯る。

鉄男「ああ、よかった」

ランカスター「突然消えて突然灯る<sup>とも</sup>。

一体何でしょう」

鉄男「分かりません」

ランカスター「コンピューターに解析させま

しょう」

鉄男「そうですね。

ところでこのあと、この船はどうなるんで

すか？」

ランカスター「たぶん星屑になってしまいうで

しょうね」

鉄男「なんとかならないでしょうか」

ランカスター「進む方向さえ修正できれば、

ほんのちよつと望みがありますが。

あ、それでもだめだ。

7号が火星に近づいても、速度が速いから、

かえって火星の重力のため、スイングバイ



で速度を増して飛び去って行く」

鉄男「ああ」

ランカスター「2台のマーズ号が20回往復して2240人を火星に送り届けるはずでしたが、しかたないですね。

あとは祈るばかりです

8号に帰りましょう」

鉄男「ちょっと待ってください。

つまりパラボラを正確に火星に向けられれば、減速できるんですね」

ランカスター「そうなんですけど、それは無理でしょう」

鉄男「私は、地球出発以後、燃料節約のため、テレポーターションで軌道修正を毎日やってきました。

これはあなたと連絡が取れてから考え始めたのですが、今回もマーズ7号を回転させて、お尻を火星に向けることも可能ではないと思います」

ランカスター「テレポーターション？

本当ですか？」

鉄男「急激に回転させると、機体に不具合が  
起こることもあるんじゃないかと、だから」  
ランカスター「角度にして少しづつ、ゆっくり  
りやれば・」

鉄男「やってみませんか」

ランカスター「ヒューストンに連絡してみま  
す。」

返事が来るのは遅くなりますが」

鉄男「それでは間に合いません。」

ランカスター「うーん。」

このままいくと高い確率で7号は遠くへ

飛び去ってしまいます。

やってみましょう」

ジェシー「それじゃ、船長、マーズ8号へ移

動してください。

船長コマンダーがいけないのは困りますから」

ランカスター「そうだな。」

でもジェシー、君はどうする？」

ジェシー「テツツオを補佐します」

ランカスター「そうだな。

それがいい」

鉄男「あ、この船のコンピューターの名前

は？」

ジェシー「オリンです」

鉄男「8号に戻ったら、シューターをすぐ解

除して、7号から離れて下さい。

そばにいと危険ですから」

ランカスター「じゃ、これで。

健闘を祈ります」

○ 2機の宇宙船の浮かぶ宇宙

2体のロボットがシューターを格納している。

作業完了とともに、2体はそれぞれの宇宙船に帰還。

それとともに8号が7号から離れてゆき、それに伴って双方の太陽光パネルが展開され、ホイールが回転を始める。

○7号着陸船操縦室

鉄男、メイン操縦席に。

ジェシーはその横に。

突然8号との通信回路が開く。

ステフ「テッツオ、なにやってるの！」

鉄男「ああ、ごめん。夢中になって連絡を

忘れていた」

ステフ「7号をターンさせるんですって？」

鉄男「そうなんだ」

ステフ「それって危険なことでしょう？」

鉄男「分からない」

ステフ「マーズ7号よりあなたが大事だわ」

鉄男「それは分かるけど、人類にとっては、

この船は一筋の希望なんだ」

ステフ「待ってて。」

そちらへ行くから」

鉄男「あ、だめだ、だめだ」

ステフ「行きますっいたら、行きます」

鉄男「だめだっていうのに！」

モニター暗転する。

○マーズ7号のフェリーポート格納庫

エアロックが解除されて、7号のフェリーポートの横に、8号のフェリーポートが入ってくる。

入ると同時に扉が閉じて、空気が送り込まれる。

ステフ、キャリー、ジョンが船内宇宙服を着て降りてくる。

とはいってもキャリーの宇宙服はダボダボで、ジョンがかかえている。

エアロックの外に出ると、そこにジェシーが立っていた。

ステフ「まあ、ジェシー！」

ジェシー「さあ、行こう。

あっ、その子は……」

ステフ「キャリーよ」

ジェシー「そうか、君がキャリーか。

ヘルメットを取ってお顔を見せて」

ジェシー、キャリーのヘルメットを取  
る。

キャシー、不思議そうな顔をして

キャリー「ママ、この人だあれ？」

ステフ「ジェシー・ダグラスさんよ」

キャリー「ふうん」

○マーズ7号の着陸船操縦室

4人が入ってくる。

鉄男「ああ！」

ステフ「さあ、来たわよ。

やることだけやって、さっさと8号に帰  
ましょう」

ジョン「言うこと聞かないんたよ、この人は」

鉄男「ジョン、あなたまで」

ジョン「私たち4人は家族なんだ。

離れるわけにはいかない」

鉄男「仕方ない。

じゃ、やるから。

オリン、はじめまして。

岡田鉄男と申します。

君の力が必要です。

どうぞ助けてください」

オリン「こちらこそ、どうぞよろしく。

何をするのですか？」

鉄男「7号のパラボラを火星に向けます。

それを手伝ってください」

オリン「はい」

鉄男「火星をモニターに写してください」

即座にモニターに火星が画面右端に。

鉄男みんなに説明。

鉄男「7号の進行方向を修正します」

鉄男、意識を集中して7号の向きを修

正する。

ロケットの先端が火星の少し右に来る。

ジェシー「これは、これはなんですか？」

ステフ「テレポーションよ」

ジェシー「ああ、これが！」

鉄男「火星の地上から1000Km位に7号

を浮かべようと思います。

どうでしょう」

ジョン「私にもわからない。

人工衛星の高度設計はたぶんたいへんな計算に基づいていると思う。

だから、我々素人には無理だ」

鉄男「でも、今やらなきゃ」

ジェシー「オリン、もともとマーズ8号が一年間待機する高度は1500 Kmだったね」

オリン「1500 Kmです。

これはプラズマビーム砲の高さとほぼ同じです」

鉄男「それでいきましょう。

オリン、火星の縁の横に、プラズマビーム砲の位置を表示してください」

火星の横に青い点が表示される。

鉄男、マーズ7号の先端をそれに重ねる。

鉄男「赤経をワイヤー表示し、現在の7号先端を0としてナンバーを振ってください」

オリン「はい」



鉄男「このカメラは、1台で同時に真後ろも写せるんですけどね」

ジェシー「そうです」

鉄男「後ろのカメラの画像を表示」

オリン「はい」

するとモニターの下半分に、7号のパラボラの上部分が写り、赤経のナンバーが12に。

鉄男「今から7号を回転させていきます。

まず赤経11に移動」

テレポーターションで、かすかなミッシュという音とともに中央の赤経が11に。

ジェシー「なんと！」

こうして、時間をかけて機体を回転させてゆく。

6回試みたとき、画面に8号の機影。

鉄男、額の汗を拭う。

ステフ、持ってきたバッグの中から、チューブを5つつ取り出し、それを見

んなに配る。

ステフ「水分の補給よ」

鉄男「ありがたい！」

キャリー「私も喉がカラカラ」

5人はゆっくり水を飲む。

鉄男「ああ、生き返った。

どうもありがとう」

ステフ「どういたしまして」

鉄男「じゃ、続けます」

こうして後6回の移動で、モニターに火星から1500Kmの位置に、7号のパラボラの中心が。

鉄男「オリン、火星のパラボラ砲と、この船のパラボラのズレがあるけど、プラズマビームの受け渡しは出来そうですか？」

オリン「この距離だと、向こうの発射砲が自動的に位置を修正できますから大丈夫です」

鉄男「よかった。

これから私たちはフェリーポートで8号

に帰ります。

オリン、あなたはブラズマビームを受けて逆噴射して、7号の速度を落とし、火星の人工衛星として、2年後まで、火星に墜落しない高度と、速度を保ってください。出来る範囲でいい。あとはまかせる。さあみんな、帰ろう」

○8号ホイール・ルームA

多くの人々が、立錐の余地なく立っている。

壁のモニターに7号の逆噴射の様子が映し出される。

ステフ「7号のみなさん、ご無事でなによりです。おめでとう」  
ランカスター「ありがとう」

ほんとにありがとう」

ジョン、秘蔵のウイスキーの入った紙コップをみんなに回す。

子供達にはオレンジジュースが。

おお！酒だ！酒だというどよめきが。

ジョン「違法に持ち込んだ私の最後のウイス

キーです。

心して味わってね」

オーという歓声が。

みんなに行きわたった時、ランカスタ

ーが紙コップを掲げ、

ランカスター「8号の皆さんのおかげで我々

は助かりました。

途中、絶望して自殺したウィチャリー家、

鈴木家、フラン家の6人に、哀悼の盃を揚

げたいと思います。

7号よ、永遠に！ 乾杯！」

ランカスター、涙を溢れさせながら、

酒を飲み干す。

部屋にはむせび泣く声が満ちる。

ランカスター「さて、これからですが、8号

もプラズマエンジンを全開して逆噴射し

ます。

それで火星の周回軌道に入り、火星への着陸を目指します。  
みなさんは、以前住んでいたのと同じ居室で指示を待ってください。  
普通に飲食・睡眠をとってもかまいません。指示があるまで、体調を整えて待ってください。  
さい

○マーズ8号ホイール・エアロック（夜）

誰もいない部屋にジェシー、それとジョン、ステフ、キャリー、鉄男が椅子に座っている。

鉄男「じゃあ、キャリー、ジェシーが誰なのか教えてあげる」

ステフ「ちよつと待って。

そんな急に」

鉄男「いつまでも伏せておくわけにはいかない。  
い。

そうでしょ、ジェシー」

ジェシー「それはそうですが・・・」

鉄男「ジョン、あなたもそう思いませんか？」

ジョン「そうだね、何日か前からみんな、これについては考えていたはずだから」

鉄男「これで決まり。」

キャリー「ジェシー・ダグラスさんは、君の本当のダディなんだよ」

いわれてキャリーはキョトンとした顔

キャリー「私のダディはテッツオでしょ」

鉄男「そうなんだけれども。」

あのね、育ての親って知ってる？」

キャシー「知らない」

鉄男「育ての親というのは、ほんとの親が、どうしてもその子を育てられないとき、

かわりにその子を育てる人なんだ。

私はその育ての親なんだ」

ジョン「なんとまあ、うまい抜け道を」

鉄男「ジョン、言葉に気を付けて」

ジョン「お、すまない」

鉄男「ジェシーは、マーズ8号に乗るはずが。」

間違っ て7号に乗ってしまっ たんだ。

だけど8号がなんとか追いついて君に会

いに来 たんだ」

キャリー「テツツオはどうなるの？」

鉄男「私はこれから君のすぐ近くにいます。

一緒に遊ぶこともできる」

ステフ「ちよっと待って！」

私はどうなるの？」

鉄男「ここからの話はキャリーにはむずかし

い。

すみません、ジョン、キャリーをしばらく

散歩に連れて行ってもらえませんか」

ジョン「ここから面白そうなんだけどね。

さあ、キャリー、散歩に行こう」

キャリー「いやだ、ここにいる」

ジェシー「キャリー、こんなの欲しい？」

と胸のポケットからロリポップ・キャ

ンディを1本取り出す。

キャシー「うわあ、何それ！」

ジェシー「甘いキャンディだよ。」

欲しい？」

キャシー「うん」

ジェシー「じゃあ、散歩して来てね」

キャシー「うん」

とジェシーの手からもぎ取るように

キャンディを。

キャシー「ママ、すぐ帰ってくるからね」

と、さっさと次の部屋へ。

キャシー「早く、ジョン！」

せかされて後を追うジョン。

鉄男「さあ、これからのことですが。

ジェシー、あなたはもう思ってるんですか」

ジェシー「私には、どうこう言う資格がない。

ISSから帰還するときに、無理にでも

ステフも連れて帰るべきだった」

ステフ「そんなの無理よ。

帰還船の乗員は数が決まってるから」

ジェシー「それはそうだけど」

少しの間、無言の時間が。



鉄男「ステフ、あなたは？」

ステフ「・・・ああ、もうわかんない」

鉄男「どうするか、思いつかない？」

ステフ「そんなの無理よ」

鉄男「ジェシーも決められない。

ステフも決められない。

じゃあ私が決めるほかない。

それでいいですね」

二人を覗き込んで尋ねる鉄男。

鉄男「じゃ、私が決めます。

ジェシー、あなたは今でもステフを愛して

ますか？」

ジェシー「ええ、愛しています」

鉄男「じゃあ決まりだ。

あなた方二人は、火星に着いたら、正式に

結婚してください。

お願いします」

ステフ「でも・・・」

鉄男「私のことはいい。

私は、ジェシーと会ったときから、ステフ

の目の表情を追っていました。

その中には彼を拒む色は微塵も浮かんでいなかった。

ということとは、このまま私との関係を続けて行けば、必ず破綻が訪れる。

そんな辛い思いをするのは嫌です。

あなた方のためというよりは、自分のために、できるだけ早く決着するほうがいいと決めました」

ステフ「そんな・・・」

鉄男「あなたが私を好いていてくれたことは嘘じゃないと分かっています。

そのことに感謝します」

鉄男、二人の手を取り、握手させ、その上に自分の手を重ねる。

鉄男「これからも、いい友達でいきましょう」

ステフ「そんなに簡単に決めないで！」

ああ、もうなにがなんだか」

鉄男「今日からジェシーは、二人と同じ部屋で生活してください。」

私は、別の部屋のベッドで寝ますから」

ステフの目から涙が。

彼女を抱きしめたい気持ちを抑えて

部屋を出てゆく鉄男。

### ○マーズ8号操縦室

ステフとキャリーのそばに一人のアジア系の女が近づく。

マニー・ランカスター（40 ランカスター

船長の妻）

「あなたが3年もマーズ号で子育てした

ミランさん？」

ステフ「ええ。そうですけど」

マニー「私はランカスターの妻マニーよ。

あなたは英雄ね、3年も宇宙で子育てして」

ステフ「ええ、まあ、でも英雄じゃないです」

マニー「いろいろ大変なことがあったでしょ

う、赤ちゃん。

例えばおむつはどうしたの？」

ステフ「ああ、おむつね。」

あれは余っていた紙の下着をたたんで使いました。

即席でひもを作って」

マニー「ああ、なるほど。

おむつカバーは？」

ステフ「これも食品を入れていたビニールの袋に足の出る穴を空けて」

マニー「まあ！」

笑い出すマニー。

マニー「ごめんなさい、笑ったりして。

でも、印刷されたビニールを腰に巻いている赤ちゃんを想像して、ハハハハハ」

ステフ「そうですね、おかしいですね、ハハ

ハハハ」

マニー「ミルクは？」

ステフ「幸い母乳がたくさん出ましたから」

マニー「そう、それは良かったわね。

それで赤ちゃんは病気は？」

ステフ「一度、熱を出して。

知る限りの手当てをしましたが治らず。

ただこの子を素肌を抱いてシーツをかぶり、  
何時間も寝ていました。

幸い私の基礎体温が35℃と低かったため  
熱さましになったと思います。

2日目にやっと熱も引いて安心しました」

マニー、ステフをハグして

マニー「たいへんだったわね。

たった一人で」

T 「65日目」

○ マーズ8号ホイール操縦室

7号の乗組員<sup>クル</sup>6人が集まっている。

ステフとキャリーとジェシーと鉄男、

ジョンの5人は、船内用の宇宙服を着  
ている。

みんな中央のモニターに釘付けに。

そこには、火星上空のプラズマビーム

発射砲の近くを通り過ぎる7号が。

ランカスター「やはりちよっとスピードが速  
すぎるようだけど、リンカーン、7号は火

星に留まれるのか？」

リンカーン「データが少なすぎて判断できません」

ランカスター「そうか。

あとは祈るほかないな、さて」

ジョン「宇宙服の足と腕をたくし上げて、なんとかキャリーのサイズを合わせたけど」  
ジェシー「苦しくない？」

キャリー「うん」

鉄男「あつという間だから」

ステフ「ようやく、火星の周回軌道に入って  
2日。

みなさんは、今から着陸船で火星に向かいます。

たった6分の飛行で着陸できます。

6号までのすべての船が着陸に成功して

いますから、心配ないでしょう。

ところで、私と娘のキャリーとジェシーと  
ジョンは、岡田さんのテレポーターション  
で、直接火星に降ります。

着陸船での負荷が、キャリアーには耐えられないからです。  
皆さんとはしばしのお別れです。  
東キャナルで会いましょう」

全員が拍手。

ランカスター「じゃ、私たちは着陸船に乗り込みます。  
成功を祈ってます」

ランカスターたち乗組員6名は、鉄男たちと握手して、スポークで着陸船へ移動。

○マーズ8号着陸船操縦室

6名の乗組員全員が座席に着いている。

ラナカスター「火星表面の気象は？」

リンカーン「砂嵐も収まり、晴天です。気流も穏やかです」

ランカスター「全員無事に座席に収まったよ  
うだから、まず、貨物機を火星に下ろしま  
す」

スイッチを押すランカスター。

○火星軌道上のマーズ8号

4機の貨物ロケットが、バネの力でスルスルと8号の横からから順次間隔をおいて離脱してゆく。離脱したあと、順次突入姿勢に。それまで着陸船を固定していた4本の支持ステーが、留め金を解除されて、大きく四方に開く。着陸船は、ゆっくりホイール中心から離れてゆく。姿勢制御エンジンが作動して、着陸船を突入角度に調整。尾部の補助エンジンから一瞬炎が噴き出し、8号は火星の大気の中へ。

○火星大気圏の8号

3分過ぎたとき、姿勢制御エンジンが、機体を火星地表に対して90度に調



整。

固形燃料のメインエンジンが動き出す。

急速に地表が近づいてくる。

8号の尾部から着陸用の4本の足が開く。

○東キャナル基地の着陸場

8号が炎を噴き出しながらゆっくり

近づき、4本の足が大地を掴む。

同時に噴射が終わる。

その周囲には間隔を取って貨物機が

着陸を完了している。

○8号のフェリーボート

フェリーボートに座っているキャリー

ステフ、鉄男、そしてジェシーとジヨ

ン。

鉄男「いよいよ出発ですね」

ジェシー「リンカーン、最後の任務だ。

フェリーボートを吐き出して」

リンカーン「はい、どうぞご無事で」

ステフ「ありがとう、リンカーン。」

あなたは、16か月後に地球に帰るのね」

リンカーン「はい。」

また新しい着陸船を積んで戻ってきます」

ステフ「さようなら」

リンカーン「さようなら」

○ マーズ8号・ホイール

船体から、6人乗りのフェリーボート  
が吐き出される。

フェリーボートは姿勢制御エンジンを  
ふかして、機体を火星表面と平行に。

○ フェリーボート内部

操縦席にジェシー、その横に鉄男。

ジェシー「フェリーボートは2機のマーズ号  
の連絡用だから、これで着陸というのは、  
無理があるように思うんだが」

鉄男「おっしゃっていることはよくわかります。

このボートのメイン・エンジンはテレポーションです。

ただ姿勢制御はこの機に頼らねばなりません。

ジェシー、フェリーボートを火星基地の真上に誘導してください」

ジェシー「わかった」

鉄男、ヘルメット内の3Dゴーグルをセツトする。

見回すと、上は満点の星空。

下は荒涼とした火星の大地。

画像は右から左へとゆっくり動いてゆく。

しばらくして北半球赤道近くの、アマゾニス平原の東キヤナルの特徴的な星形の構造物が。

鉄男「東キヤナルが見えました。

ジェシー、エンジンを止めてください。

これから降ります」

ステフ、キャリーの方を見る。  
キャリーは興味津々の面持ち。  
何回か高度を変えながら瞬間移動  
を繰り返して地表近くに。

○東キャナル基地の着陸場

フェリーポートが地上10mのところ  
で一瞬静止。

そして小刻みに高度を下げ、着陸。  
途端に回りのすべてのものが波のよう  
に揺らぎ、光が明滅する。  
そしてすべての光が消える。

○フェリーポート内部

鉄男「なんだ！」

ステフ「一体何が！　またこの間のような

ことが！」

キャリー「ママ、怖い1」

鉄男「ジョン、これは一体！」

ジョン「もしかしたらと思っていたことが・・」

ステフ「もしかしたらってなに？」

ジョン「うん」

ステフ「船内の照明は？」

ジェシー「手探りで操縦席の前のパネルに触る。」

4人の上から光が降り注ぐ。

鉄男「前方を照らせない？」

ジェシー「スイッチを入れるが照明はどこにも届かず、真っ暗闇のまま。」

ステフ「テツツオ、テレポートして、この場

所から逃げられない？」

鉄男「ここがどこかもわからない。」

私は、目と記憶で認識できるところへしか  
テレポートできない」

ジェシー「みんな、ヘルメットを脱いで」

ステフ「え？」

ジェシー「宇宙服の酸素を止めて」

鉄男「そうか。」

その酸素は最後まで取っておくんだ」

全員ヘルメットを取る。

ステフ、キャリーのヘルメットを脱がし酸素のスイッチを切る。

ジョン「このフェリーボートの酸素は？」

ジェシー「5人だから15時間前後」

キャリー「ママ、お腹すいた」

ステフ、足元のバッグからチューブを5本取り出して、配る。

ステフ「とにかくなんか食べましょう。

気分が落ち着くから」

キャリー「これなに？」

ステフ「えーっと、コーンスープ」

ジョン「そうだな。

食べることはいいことだ」

5人、チューブのふたをねじって飲み始める。

ステフ「ジョン、さっき言いかけたことは？」

ジョン「うん。

最初の日にはテツツオが月までテレポートした時のことだ。

光は1秒に30万Km進む。

ところがテツツオは一瞬で月までの38万Kmを進んだ。

これは、ヒューストンの言ったとおりだ。そのとき私は気づいたんだ。

これは大変なことになると。あの通信の遅れでマクニールが言っていたように、この船の中の時間と、外の時間が変わってしまった。

次に、ずいぶん先に進んでいるはずの7号に、やすやすと追いついたことだ。

これも時間の進み方が違っていたからだ。速い流れの時間は、密接にテツツオと連結しているようだ。

この先何が起きるのか・・・」

静かに重苦しい沈黙が。

鉄男「東キャナル基地に連絡できないですか」

ジェシー「通信スイッチを入れても反応なし」

ジョン「気を落ち着けて、静かに待とう」

キャリー「ママ、怖い」

ステフ「ごめんね」

鉄男「ダデイがお話をしてあげよう。

それでいいだろ」

キャリー「うん」

鉄男「じゃ、目をつぶって聞いてね。

それでは、日本の古いお話。

昔むかし、あるところにおじいさんと、

おばあさんが住んでおりました。

おじいさんは、山へ薪拾いに。

おばあさんは、川で洗濯を。

その時川上から大きな桃が流れてきまし

た、ドンブラコ。ドンブラコ。

おばあさんは、しゃがんでその大きな桃を

力いっぱい持ち上げました。

とたんにおならがプー」

これを聞いてキャリーばかりか、ステ

フもジョンもジェシーも笑い転げる。

ステフ「下品ね」

鉄男「テツツオはもとも下品な人でした。

そこへおじいさんが帰ってきました。



おおきな桃を見て、こりやうまそうな桃  
だわい。

そういつて桃を持ち上げようとして、  
おじいさんもおならをプー

キャリーの喜ぶことこの上なく。

ジョン「どこまで続くんだい？」

鉄男「先のことなど、わからない。

そしておばあさんが包丁で桃を剥むこうとし  
たとき、桃が二つに割れて、中から元気な  
男の赤ちゃんが出てきました。

おばあさんは喜んで、おじいさん、不妊治  
療に行かなくてすんだわと言いました。

おじいさんも、あれは高いからなあと、喜  
びました

キャシイ「ふにんちりようってなあに？」  
ステフ「（笑いなながら）大きくなったら教えて  
あげる。

バカね、テツツオ

鉄男「テツツオは本当はバカでした」

鉄男は桃太郎の話に尾ひれを付けながら30分以上も話し続ける。

ステフ「テツツオ、この子、寝たわよ」

鉄男「ああそう、それはよかった」

ジョン「君はほんとに幼稚園の先生になればよかったのに」

鉄男「またその話ですか」

ジョン「さて、私たちも少し寝ないかね」

ステフ「そうね。」

この先何がおこるか分からないし、  
こうして5人は不安の中目を閉じる。

T 14時間後

○ 同・機内

5人は、チューブのスープをすすって  
いる。

ジョン「長いなあ、この時間。」

「いったいここはどこなんだろう」

鉄男「真っ暗で周りを照らしても、なんにも  
見えない。」

星さえも」

キャリー「ダデイ、息が苦しい。

それと寒くなってきた」

ステフ「酸素が減ってきたのね」

ジェシー「フェリーボートのバッテリーも心

配だ。

キャリーだけヘルメットを付けさせよう。

キャリーは子供だからそんなに酸素はい

らないから、長持ちするはずだ。

我々はギリギリまでがんばろう」

ステフ「そうね」

ステフ、キャリーの宇宙服の酸素チユ

ーブを開き、ヘルメットを被せる。

ステフ「どう？ 楽になった？ 」

キャリー「うん」

T 「19時間後」

5人ともヘルメットを被っている。

ステフ「ジョン、なにか考えはある？ 」

ジョン「ずっと考えていたんだが、これが起

こったのはフェリーボートが火星に着陸した瞬間からだ。

ちょうど、8号と7号のシューターが接続された瞬間と一緒だ。

これは時震（タイム・クエイク）じゃないかと思う。

違う進み方の時間が断層を超えて接触したときの・・・。

ここは火星のはずだろうと思うが・・・」

鉄男「あ、明かりが！」

ステフ「ほんとだ、明るくなっている！」

ジョン「明るい霧が・・・」

窓から見える外は霧に包まれたように。

次第に霧が晴れ始める。

前面の窓から、多くの建物が見える。

鉄男「よかった！」

ここがどこか分からないけど」

キャリー「どうしたの？」

ステフ「なんとか助かったようね」

外を見ると、1台のローバーが近づい

てくるのが見える。

フェリーボートのそばで止まると、中から1人の女性と、1人の男性が、宇宙服もつけずに降りてくる。

ステフ「え？」

鉄男「なんで？ 宇宙服なしでは呼吸できないのに」

### ○火星の地上

鉄男、フェリーボートのドアを開き、ステップを踏んで、地上に降りる。後の4人も降りてくる。

ステフ「こんにちは。」

マーズ8号のメディカル・オフィサーのミランです」

メラニー・シングルトン（52）「マーズ8号？」

ステフ「ええ、マーズ8号です。」

マーズ8号は無事に着きましたか？」  
シングルトン「何のことかしら。」

よくわからないけど。

ああ、私は東キャナル市長のメラニー・シ  
ングルトン。

こちらは市の保安官ライアン・ホール（3  
9）

ステフ「市長？ 保安官？

ところで、あなた方はなぜ宇宙服なし  
で・・・」

シングルトン「火星に空気が供給されて  
今は呼吸器なしで活動出来ています。

ご存じなかったですか？」

ステフ「そんなはずないでしょう。

火星に呼吸できる大気を作るのには10  
0年かかると言われていましたけど」

シングルトン「そう、90年かかりました」

鉄男「え？ 90年？」

ステフ「今年は何年ですか？」

シングルトン「地球歴で2140年です」

ステフ「まあ！ うそでしょう」

シングルトン「嘘じゃありません。

ともかくヘルメットを取られては？」

ジェシー、キャリーのヘルメットを取ってやる。

鉄男、ゆっくり自分のヘルメットを脱ぐ。

そこに現れた鉄男の髪が真っ白に。

ステフ「まあ、テツツオ！」

鉄男「なに？」

ステフ「髪が真っ白よ！」

鉄男「ええ？」

ジョン「ほんとだ」

鉄男「それでマーズ8号の皆さんも無事でしたか？」

「

ホール「ああ、やっとわかった。

昔の火星移住船のことだね」

鉄男「昔・・・ああそうか。

マーズ8号は、1000年近く前に火星に降り立ったんだ。」

ジョン「ということは、私たちだけが1000年後の未来に弾き飛ばされた・・・」

ホール「あの有名なマーズ8号は、無事に火星に着陸できました。

乗組員の皆さんは、今はもう全員亡くなっていますけど。

船長のランカスターさんは、あなた方のフエリーボートを捜して、一生をそれに捧げました」

ジョン「なんとということだ！」

鉄男「あの、マーズ7号は？」

メイヤーズ「7号はギリギリのところで火星の重力圏にとどまりました。

それから2年後、7号は修理されて、火星移住船として働き続けました。」

鉄男「地球の様子は？」

メイヤーズ「・・・。」

ロシアのドブゾロフが、中国と北朝鮮を征服して、民主主義国家連合フリーダムとの戦争が続いています。

それを助長しているのが、海面上昇と、大陸の砂漠化です。



多くの人の命が奪われました」

鉄男「姉ちゃん！」

ステフ「お母さん！」

ジョン「マギー！」

地面に膝をつき。うなだれるジョン。

太陽と緑の空の下の5人。

東キャナル市の街並みと、隣接する川

と草原を食い入るように見つめる。

T「テレポーターション・マン2に続く」

T（光瀬龍氏に捧ぐ）

終わり